

# 佐原市鶴崎貝塚発掘調査報告書

平成7年度

財団法人 千葉県文化財センター

さわら ときどき  
佐原市鵜崎貝塚発掘調査報告書



## 序 文

多くの日本固有文化を育んだ縄文時代は貝塚の時代ともいわれています。縄文時代になると、長い氷河期も終り、気候の温暖化に伴って海水面が上昇し、各地に遠浅の入り江が多く形成されています。縄文人は、こういった絶好の生活環境に恵まれ、近くの家や川から得られる豊富な魚介類や、山野で捕獲採集される動植物の食物資源を十分に利用して、定住生活を始めます。その結果として残された当時の「ごみ捨て場」である貝塚は、全国に約3,200か所、県内でも全国で最も多い645か所が確認されています。

とくに本県の貝塚は、加曽利貝塚を始めとして規模が大きいことで知られ、直径100m以上の馬蹄形や環状の貝塚が数多く形成されています。そのため、県内の貝塚は、古くから考古学の研究対象になるとともに、その重要性も指摘され、すでに10か所が国史跡に指定されています。

一方、首都圏に位置する地理的環境から、多くの開発事業が計画され、貝塚を始めとする埋蔵文化財保護にも、深刻な影響が及んでいます。

このため、県教育委員会では、昭和63年度から国庫補助金を受けて、県内に所在する貝塚の測量調査及び確認調査を実施し、貝塚の保護・活用の資料整備を行っております。本年度は、佐原市鶴崎貝塚を対象とし、財団法人千葉県文化財センターへ委託して調査を実施しました。

調査の結果、台地東側の斜面の谷津部分に、東西13m・南北11mの貝層が確認できました。この貝層は、出土した土器から縄文時代草創期末から早期初頭に形成されたことが明かとなり、国内でも数少ない貝塚形成初期の貴重な資料を得ることができました。

このたび、これらの調査成果を報告書として刊行するに当たって、本書が学術資料としてばかりでなく、埋蔵文化財の保護・活用にも利用されることを願います。

最後に、文化庁をはじめ、佐原市教育委員会、土地所有者、地元関係者、調査を担当された財団法人千葉県文化財センターの皆様にご心からお礼申し上げます。

平成8年3月22日

千葉県教育庁生涯学習部  
文化課長 鈴木 道之助

## 凡 例

- 1 本書は、佐原市西坂983ほかに所在する鶉崎貝塚（遺跡コード209-040）の発掘調査報告書である。
- 2 本事業は、千葉県教育委員会が国庫補助を受けて実施している県内主要貝塚発掘調査の第8年次に当たったもので、調査は財団法人千葉県文化財センターに委託して実施した。
- 3 調査及び整理作業は、調査研究部長西山太郎、成田調査事務所長石田廣美の指導のもと、主任技師高柳圭一が下記の期間に実施した。

発掘調査 平成7年10月2日～同年10月31日

整理作業 平成7年11月1日～同年12月28日

- 4 本書の執筆は、主任技師高柳圭一が行った。
- 5 昭和33年の早稲田大学調査資料の掲載に当たっては、同大学考古学研究室からの許可をいただき、菊池徹夫教授、高橋龍三郎助教授の御指導、御教示を得た。
- 6 動物遺存体の分析・鑑定は、千葉県立中央博物館小宮孟氏によるものである。
- 7 調査の実施に当たっては、佐原市教育委員会、財団法人香取郡市文化財センター、土地所有者 飯島光雄、鶉崎利雄、鶉崎文彦、飯嶋新一、長鐵工業株式会社の御協力を得た。
- 8 本書で使用した地形図は、下記のとおりである。

第1図 国土地理院発行 1/50,000地形図「佐原」(N1-54-19-9)

- 9 写真図版1の周辺地形航空写真は、京葉測量株式会社による平成7年撮影のものを使用した。
- 10 本書で使用した図面の方位は、すべて座標北である。
- 11 挿図に使用したスクリーントーンの用例は、図面に表記した。なお、縄文原体の表記は「日本先史土器の縄紋」(山内 1979)を参考として、下記のように簡略化し、また繊維を包含する土器の断面には●、口唇に切り込みを有する土器には▼を付した。

$$R \left\{ \begin{array}{l} 1 \\ 1 \end{array} \right. \rightarrow R, R \left\{ \begin{array}{l} L \\ L \end{array} \right. \rightarrow RL, R \left\{ \begin{array}{l} L \\ R \\ L \\ R \end{array} \right. \rightarrow RLR, R \left\{ \begin{array}{l} R \\ r \\ r \\ r \end{array} \right. \rightarrow 0 \text{ 段多条 } RL$$

# 本文目次

I はじめに	
1 橋崎貝塚の位置と環境	1
2 周辺の遺跡	1
3 調査の経過	3
4 調査方法	4
II 調査内容	
1 各トレンチの状況	5
2 貝塚トレンチの状況	8
(1) 9トレンチ	9
(2) 10トレンチ	17
(3) 11トレンチ	25
3 橋崎貝塚9トレンチ採集の動物遺存体	26
III 早稲田大学調査の概要	
1 調査概要	29
2 出土遺物	29
IV まとめ	42
報告書抄録	巻末

# 挿図目次

第1図 遺跡位置図	2
第2図 遺跡周辺地形図	3
第3図 1トレンチ・2トレンチ・3トレンチ実測図	6
第4図 4トレンチ・5トレンチ・6トレンチ・7トレンチ実測図	7
第5図 8トレンチ実測図	8
第6図 1トレンチ・2トレンチ・8トレンチ出土土器	8
第7図 橋崎貝塚トレンチ配置図	10
第8図 9トレンチ実測図	11
第9図 9トレンチ動物遺存体出土状況図	12
第10図 9トレンチ遺物出土状況図	13
第11図 9トレンチ出土土器(1)	14
第12図 9トレンチ出土土器(2)	15
第13図 9トレンチ出土土製品・石器・骨角器	16

第14図	9トレンチ出土貝刃	17
第15図	10トレンチ・11トレンチ実測図	19
第16図	10トレンチ出土土器(1)	21
第17図	10トレンチ出土土器(2)	22
第18図	10トレンチ出土土器(3)	23
第19図	10トレンチ出土土製品	24
第20図	10トレンチ出土石器・骨角器	24
第21図	11トレンチ出土土器	25
第22図	11トレンチ出土石器	25
第23図	昭和33年早稲田大学調査実測図	30
第24図	昭和33年早稲田大学調査資料(1)	31
第25図	昭和33年早稲田大学調査資料(2)	32
第26図	昭和33年早稲田大学調査資料(3)	33
第27図	昭和33年早稲田大学調査資料(4)	34
第28図	昭和33年早稲田大学調査資料(5)	35
第29図	昭和33年早稲田大学調査資料(6)	36
第30図	鶴崎貝塚平成7年出土土器分類図(1)	40
第31図	鶴崎貝塚平成7年出土土器分類図(2)	41
第32図	千葉県内草創期終末～早期初頭主要遺跡	図版扉裏
付図1	鶴崎貝塚地形測量図	巻末

## 表目次

表1	トレンチ杭座標値一覧	4
表2	トレンチ別出土土器個体数	5
表3	9トレンチ出土縄文土器個体数	9
表4	10トレンチ出土土器群別数量比	18
表5	シカ遺存体同定結果(1)	27
表6	シカ遺存体同定結果(2)	28
表7	早稲田大学調査資料出土位置一覧(1)	38
表8	早稲田大学調査資料出土位置一覧(2)	39

## 図版目次

- |      |              |      |                         |
|------|--------------|------|-------------------------|
| 図版 1 | 鶴崎貝塚周辺の航空写真  | 図版 7 | 早稲田大学資料 (2)             |
| 図版 2 | 遺跡遠景・遠望・近景   | 図版 8 | 早稲田大学資料 (3)、土製品・骨角器     |
| 図版 3 | 各トレンチの状況     | 図版 9 | 9 トレンチ出土の土器             |
| 図版 4 | 貝塚調査前状況・調査風景 | 図版10 | 10 トレンチ出土の土器            |
| 図版 5 | 貝塚調査区        | 図版11 | 10 トレンチ・11 トレンチ出土の土器、貝刃 |
| 図版 6 | 早稲田大学資料 (1)  |      |                         |

# I はじめに

## 1 鶴崎貝塚の位置と環境

鶴崎貝塚は、千葉県佐原市西坂983ほかに所在する。佐原市は千葉県の北端に位置し、北は利根川をはきんで茨城県に接している。市の北半は利根川沿いの水郷として知られる低湿水田地帯が形成されているが、南半は下総台地の北端部に当たり、利根川に流入する小河川によって開折され樹枝状の複雑な地形をなしている。

鶴崎貝塚は、利根川に流れ込む大須賀川の閉口部付近左岸、丘陵斜面部に位置する。貝塚からは大須賀川を直接望むことができ、さらにその北側には利根川の広大な沖積地が広がっている。

貝塚は、標高29mから32mの丘陵の東斜面の限定された部分に存在しており、水田面との比高は約25mである。丘陵の頂部は標高34mの平坦な地形となっており、貝塚部分とは2mの断差で明瞭に区別される。貝塚の南方には中世城郭跡である鶴崎城が近接し、貝塚周囲にも土塁や削平された平坦面が観察されており、貝塚部分に見られる断差も、後世における成形の痕跡と推察される。

鶴崎貝塚は昭和33年に早稲田大学の西村正衛氏により発掘調査が実施され、神崎町の西之城貝塚に次いで古い縄文時代草創期終末から早期初頭に属する貝塚であることが判明した。当該期に属する貝塚の調査例は極めて少なく、その重要性から、佐原市は昭和45年に市の史跡に指定した。しかし、調査当時は桑畑として耕作され、表面での貝の散布が観察できた貝塚も、現況ではすっかり篠竹に覆われてしまい、その所在場所すら確認できず、早稲田大学調査時とはかなり様相を異にしている状態であった。貝塚付近は畑地や荒蕪地・山林となっており、これまで開発の手が及んでいないが、近隣では宅地造成が始まり、遺跡を取り巻く状況が大きく変わろうとしている。

なお、遺跡名の鶴崎は大字名に由来し、貝塚が存在する斜面部は小字名で広畑と呼称されている。したがって、『千葉県佐原市埋蔵文化財分布地図』（佐原市教委 1979）及び『千葉県の貝塚』（千葉県文化財保護協会 1983）では佐原市鶴崎字広畑983、『千葉県埋蔵文化財分布地図（2）』（県文化財センター 1986）では、佐原市鶴崎字広畑として登録されている。また、丘陵頂部の大字名は西坂であり、丘陵頂部の包蔵地は西坂遺跡として貝塚とは別に登録されている。

## 2 周辺の遺跡（第1・2図）

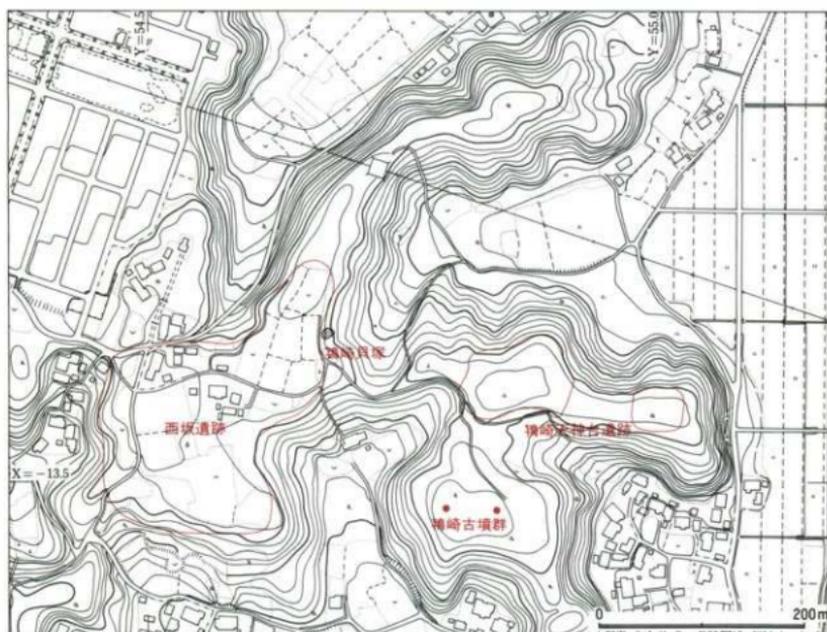
鶴崎貝塚が立地する大須賀川下流の丘陵上には、多数の古墳が築造され、中・近世の城館跡が形成されている。近接する遺跡としては、鶴崎古墳群や鶴崎城、また、近年調査された鶴崎天神台遺跡が所在しており、遺跡密度の極めて高い地域である（図2）。

利根川下流域の縄文時代貝塚の組織的な調査は、昭和25年以降早稲田大学によって実施されてきた。このうち大須賀川流域では、鶴崎貝塚のほかに後・晩期の奈土貝塚が所在し、また丘陵西方の利根川に閉口する小支谷には、前期の植房貝塚、後期の吉原貝塚、武田新貝塚が所在しており、いずれも西村正衛氏により調査されている。草創期後半の著名な貝塚である西之城貝塚は、鶴崎貝塚から西へ4kmの場所に位置している。



1: 搦崎貝塚、2: 西之城貝塚、3: 鶴房貝塚、4: 古原貝塚、5: 武田新貝塚、6: 奈土貝塚、7: 庚塚遺跡

第1圖 遺跡位置圖 (1:50,000)



第2図 遺跡周辺地形図 (1 : 5,000)

大須賀川流域の草創期後半から早期の遺跡としては、近接する鶴崎天神台遺跡があり、花輪台Ⅰ式や三戸式・田戸下層式とともに日計式が出土している。大須賀川の上流5kmには、三戸式・田戸下層式の良好な遺跡である庚塚遺跡が所在する。庚塚遺跡では花輪台Ⅰ式の良好な資料や早期沈線文の土偶も出土しており、近隣の比較資料として重要な遺跡といえる。なお、当該期の著名な貝塚である花輪台貝塚は、利根川の西方約25km、城ノ台貝塚は東方約15kmに位置している(第32図)。

利根川下流域では、条痕文土器のところに鹹水の浸入が非常に高まったとされている。草創期後半の西之城貝塚では小型のヤマトシジミを主体とし、鹹水産貝類がごく少量しか認められなかったことから、海進の汀線が神崎には達していなかったことが想定されている。鶴崎貝塚ではより大型のヤマトシジミを主体にハマグリ・マガキ・アカニシの鹹水産貝類が加わることから、早期初頭の大須賀川下流域は淡水の影響を強く受けてはいたものの、利根川本流付近では鹹水産貝類が棲息していたと推察されている。利根川の上流に位置する花輪台貝塚でも鶴崎貝塚と同様の貝類組成が認められており、汀線は利根川本流に沿って遡っていたことがうかがえる。

### 3 調査の経過 (付図1)

今回の調査は、鶴崎貝塚の範囲と貝層の状況を把握し、貝塚の保護・活用のための基礎資料を得ることを主眼としていたため、トレンチ調査と業者委託による地形測量を実施した。調査は10月2日から開始したが、貝塚部分は篠竹に覆われており、調査に当たり草刈作業を要したため、まず丘陵頂部のトレンチ調

査を優先し、その間貝塚部分の草刈作業を実施した。

丘陵頂部では貝塚に伴う時期の生活の痕跡を検出するため、農作業の影響の少なそうな場所を選択して、7本のトレンチを設定し、確認調査を実施した。しかし、ほとんどのトレンチは表土直下がハードローム面になっており、縄文時代の遺構は検出できず、掘込みの深い歴史時代の遺構のみが検出された。これにより丘陵頂部の大部分は後世の削平を受けていたことが明らかとなった。

貝塚部分の調査は、草刈作業終了後ボーリング調査を実施し、まず貝塚の範囲の把握に努めた。その成果を踏まえ、貝塚の範囲と過去の調査地点との関連を明確にするため、貝塚本体に3本と、貝塚北側外縁に1本トレンチを設定した。その結果、貝塚外縁では丘陵頂部同様直ぐに地山面に達し、遺物もほとんど出土せず、後世の削平を受けていたことが想定され、貝塚は谷部に形成されたため残存し得たものと判断された。

調査期間中は天候に恵まれ、作業は比較的順調に進行し、すべての作業は10月31日に無事終了した。

#### 4 調査方法

調査は、貝層分布の把握を目的とするボーリング調査と、貝層や遺構の状況を把握するためのトレンチ調査とに分けられる。

鶴崎貝塚は、草刈終了後表面での貝の散布状況から、ある程度の範囲を把握することができた。範囲が狭く限定されていることもあり、ボーリング調査には時間を要しなかったが、篠竹に覆われていたため、ボーリングステッキが余り入っていかず、良好な感触が得られたのは斜面上部のみであった。下半については、表土に混じる貝殻に惑わされ、正確な範囲は掌握できなかったが、トレンチ調査により貝層の状況を正確に把握することができた。

トレンチの設定はすべて任意であり、地形測量に際し、各トレンチそれぞれ2点のトレンチ杭から公共座標値を測定している。トレンチの名称は、調査順に名称を付し、合計で11本になっている。

杭番号	X座標	Y座標	杭番号	X座標	Y座標
1 T-1	-13327.255	54634.589	6 T-2	-13299.141	54640.367
1 T-2	-13321.942	54626.134	7 T-1	-13374.223	54665.635
2 T-1	-13324.946	54652.202	7 T-2	-13380.342	54666.070
2 T-2	-13315.214	54654.437	8 T-1	-13347.409	54671.743
3 T-1	-13337.654	54666.210	8 T-2	-13339.743	54674.008
3 T-2	-13327.959	54668.667	8 T-3	-13341.427	54679.733
4 T-1	-13343.143	54625.668	9 T-1	-13359.791	54672.767
4 T-2	-13341.346	54617.889	9 T-2	-13365.790	54672.543
5 T-1	-13350.354	54648.794	10 T-1	-13354.931	54676.770
5 T-2	-13349.001	54641.919	10 T-2	-13354.991	54686.450
6 T-1	-13303.600	54648.153	10 T-3	-13354.877	54669.788

表1 トレンチ杭座標値一覧

## II 調査内容

### 1 各トレンチの状況

丘陵頂部で遺構が検出されたトレンチは4本で、竪穴住居跡が7軒、溝状遺構が2条検出された。すべて古墳時代以降のもので、縄文時代の遺構は検出されなかった。出土遺物もほとんどが土師器で占められ、縄文土器は7本のトレンチで、わずか37点のみであった(表2)。

1 トレンチ(第3図) 丘陵西側斜面近くに設定した。西に緩く傾斜し、表土直下に竪穴住居跡が2軒、土坑が1基検出された。丘陵の縁辺で緩く傾斜しているため、丘陵中央部に比べ後世の削平の影響が少なく、遺構の遺存状況は良好である。住居跡はいずれも古代の所産であり、トレンチ内出土の縄文土器は25点出土し、丘陵頂部のトレンチの中では一番多かった。

2 トレンチ(第3図) 丘陵中央部に南北方向に設定した。トレンチャーによる耕作痕が東西方向に走っている。表土下直ぐにハードロームになっていることから、後世の削平を受けたのが明らかである。竪穴住居跡は3軒確認されたが、内2軒は切り合っている。いずれも古代の所産で、トレンチ内出土の縄文土器は6点であった。

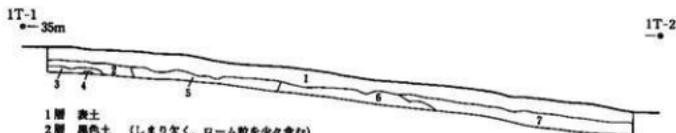
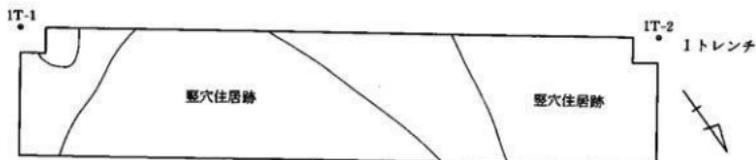
3 トレンチ(第3図) 丘陵東側斜面近くに南北方向に設定した。縁辺部のため、中央部に比べ遺構の遺存状況は良かったが、トレンチャーによる耕作痕が東西方向に走り、住居跡の床面にまで達していた。遺構は古代の竪穴住居跡1軒とそれを切る溝状遺構が検出された。トレンチ北側にも形状の不明瞭な落込みが確認されたが、サブトレンチを入れた結果、遺構とは認定できなかった。トレンチ内の縄文土器の出土は3点であった。

5 トレンチ(第4図) 丘陵中央部の耕作地に東西方向に設定した。表土下直ぐにハードロームが検出され、上面が削平を受けていることが判明した。トレンチ東端に落込みが確認され、サブトレンチを設定したが、覆土はしまりを欠き、住居跡と認定するには至らなかった。

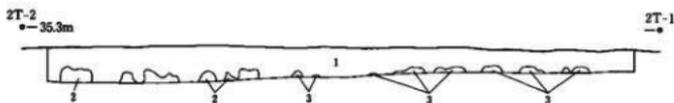
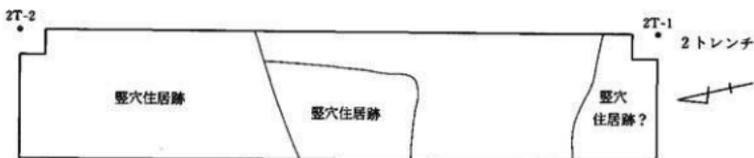
6 トレンチ(第4図) 丘陵西側斜面、1トレンチの北方25mに設定した。西に緩く傾斜し、古代の竪穴住居跡が1軒とそれに切られる溝状遺構が1基検出され、トレンチ西端に攪乱が認められた。サブトレンチを入れた結果、住居の床は東端で検出されたが、床に段差があることから、住居跡の重複の可能性も

	縄文早期	縄文前期	縄文その他	古墳時代以降
1トレンチ	6	11	7	615
2トレンチ	1	2	3	364
3トレンチ		2	1	163
4トレンチ				6
5トレンチ	1			88
6トレンチ	1	1	1	169
7トレンチ				8
総数	9	16	12	1,413

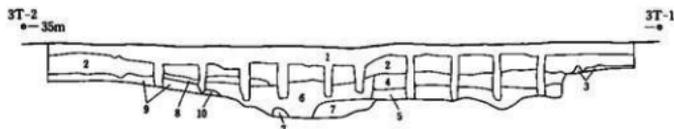
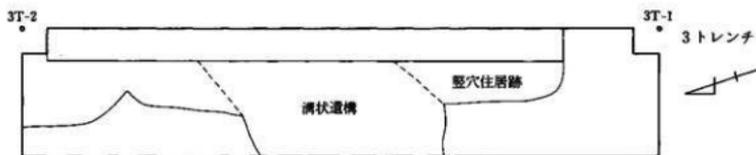
表2 トレンチ別出土土器個体数



- 1層 表土
- 2層 黒色土 (しまり欠く、ローム粒を少々含む)
- 3層 暗褐色土 (土状礫土、しまり欠く、ローム粒を多く含む)
- 4層 暗紫色土 (ソフトローム)
- 5層 暗褐色土 (住居覆土、しまり欠く、ローム粒・焼土粒を含む)
- 6層 暗褐色土 (しまり有り、ロームが多く混じる)
- 7層 黒褐色土 (住居覆土、しまり有り、ロームブロックを多量に含む)



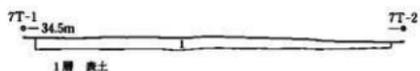
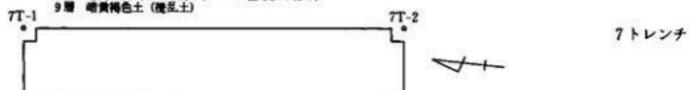
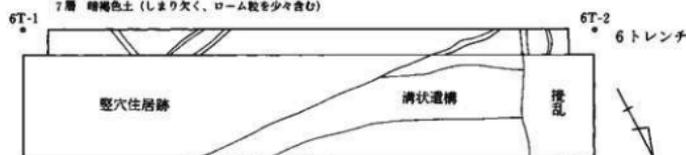
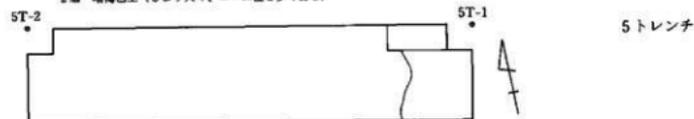
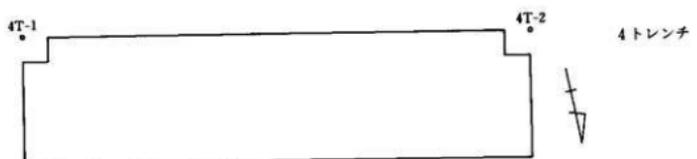
- 1層 表土
- 2層 暗褐色土 (住居の覆土、しまり欠く、ロームブロックを多量に含む)
- 3層 黄褐色土 (ハードローム)



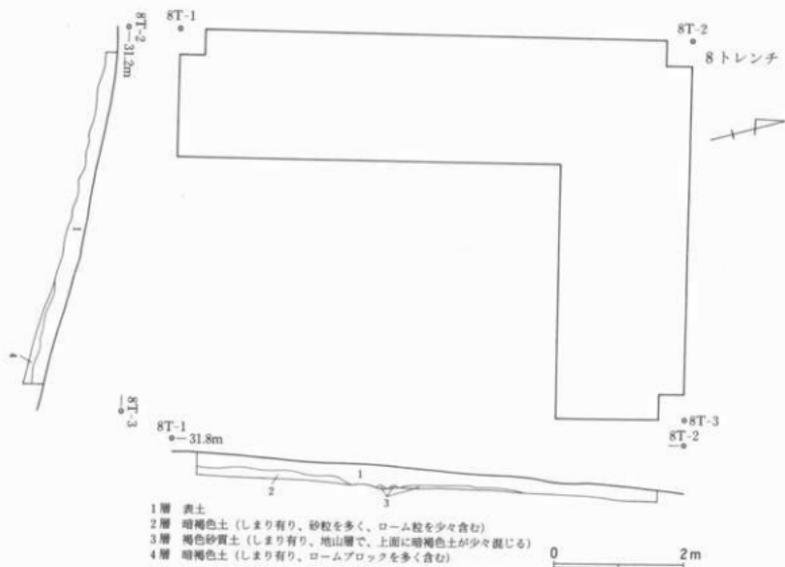
- |                                    |                                    |
|------------------------------------|------------------------------------|
| 1層 表土                              | 6層 暗褐色土 (遺構覆土、しまり有り、ロームブロックを多く含む)  |
| 2層 暗褐色土 (しまり有り、ローム粒を少々含む)          | 7層 暗黄褐色土 (遺構覆土、しまり有り、ロームブロックを多く含む) |
| 3層 暗褐色土 (しまり欠く、ローム粒を多く含む)          | 8層 暗褐色土 (しまり有り、ロームブロックを多く含む)       |
| 4層 暗褐色土 (住居覆土、しまり欠く、ローム粒・焼土粒を少々含む) | 9層 暗褐色土 (しまり欠く、ローム粒を少々含む)          |
| 5層 暗褐色土 (住居覆土、しまり欠く、ローム粒を少々含む)     | 10層 暗黄褐色土 (しまり欠く、暗褐色土が少々混じる)       |

0 2m

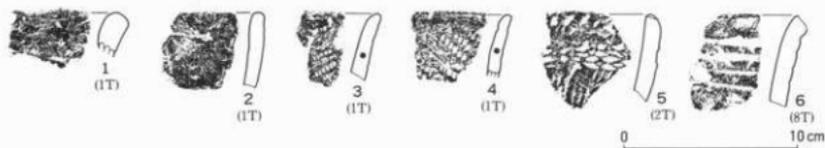
第3図 1トレンチ・2トレンチ・3トレンチ実測図



第4図 4トレンチ・5トレンチ・6トレンチ・7トレンチ実測図



第5図 8トレンチ実測図



第6図 1トレンチ・2トレンチ・8トレンチ出土土器

考えられる。

8トレンチ (第5図) 貝塚が所在する斜面部に、L字形に設定した。貝塚の北側外縁部に当たり、トレンチ南端は貝塚本体から3m離れている。遺構は検出されず、表土下直ぐに、褐色砂質の地山面に達している。南北方向に並行して走る耕作痕と思われる細い溝の中から、遺物の多くが出土した。

総数15点の遺物が出土したが、縄文土器はわずかに1点のみで、第6図6は横位に沈線が施文される田戸下層式である。他はすべて土師器であった。

## 2 貝塚トレンチの状況 (第7図)

鶴崎貝塚は、既に早稲田大学調査による測量図が公表されており、ボーリング調査と表面観察から南北12m、東西10mの小規模なものであることが明らかになっていた。今回はその範囲を明確にすることを主眼としたため、ボーリング調査と並行して貝層縁辺部のトレンチ調査を実施し、その結果、貝塚の広がりを

明らかにすることができた。貝塚は南北11m、東西13mの規模を測る。下端は流込みと思われる薄い貝層で、貝塚本体の東西幅は約10mであったことが判明した。貝塚の南北両端は直ぐに地山面に達し、また上端も表土直下で検出されたが、下端は地表下2mにまで達しており、貝層は急激に傾斜し、谷状の地形に形成されていた。したがって、下半部はボーリング調査で範囲を把握することは不可能であり、第7図の範囲は表土に混じる貝殻の感触に影響を受けてしまっている。貝層は断差から2mの地点から形成されるが、上端は表土直下で検出され間層が存在しないこと、そしてトレンチ先端の堆積状況から判断して、貝層上面は後世の削平を受けた可能性が高く、断差同様な人為的に削平されたものと思われる。貝層上面はプライマリーな状態とは言い難いが、調査の結果良好な貝層が検出された。貝塚が谷部分に形成されていたことが、本体を良好な遺存状況に保ち得たものと推察される。

### (1) 9トレンチ (第8図)

貝層の南端の範囲を確認するため、6m×2mのトレンチを設定した。南半は表土直ぐに地山層である褐色砂質土に達したが、北半には良好な貝層が検出された。また、貝層周辺には褐色の粘質土が存在し、遺物の包含が認められた。貝層の末端は容易に識別され、入組んだ複雑な形状をなしていた。今回の調査は確認調査のため、貝層面を検出して調査を終了したが、貝層の堆積状況を明らかにするため、トレンチの西壁及び北壁に沿って50cm幅のサブトレンチを入れ、また動物遺存体分析のための貝層のコラムサンプルの採集を実施した。貝塚の掘下げに際しては、全点ドットによる遺物取上げを原則とし、貝層土壌については現地では1cm目の乾式メッシュによるフルイがけを行い、遺物の採取に努めた。

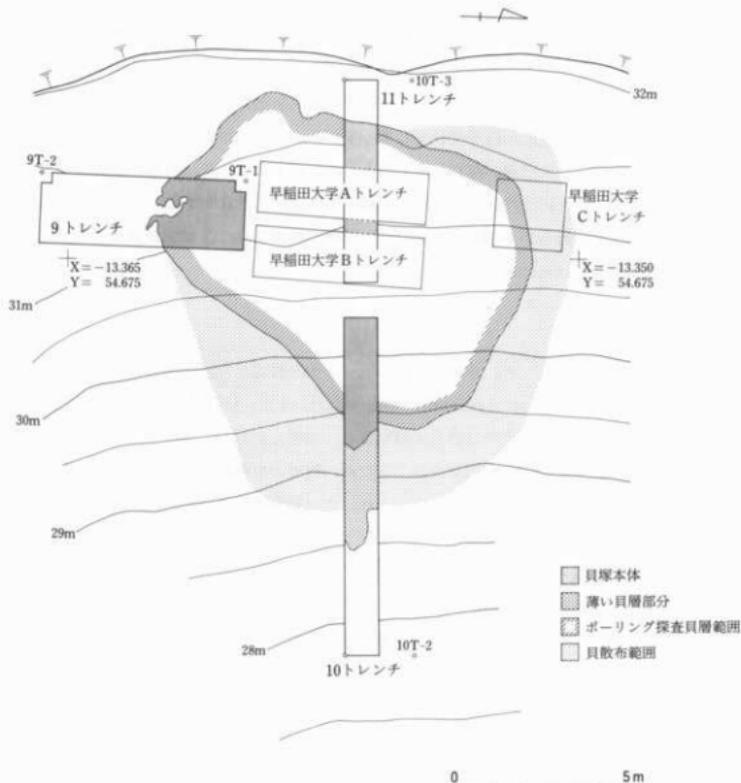
遺物の出土は貝層とその縁辺に限られ、南半では土師器が出土したのみであった。表土からは縄文土器が80点、土師器等が64点出土した。表土直下には黒色土が堆積し、早・前期の包含層を形成している。貝はほとんど含まず、下部で獣骨の出土が認められた。西村氏報告で三戸式～植房式を包含していたとされた黒色土層に相当すると思われる。

貝層は、ヤマトシジミを主体に、ハマグリ・マガキがこれに続き、アカニシが若干含まれる。現地での肉眼観察ではこの4種類にほぼ限定され、まれにカガミガイ・サルボウが確認できた。貝層は詳細に観察すると、貝殻や混土の状況から幾つかの層位に区分することが可能で、トレンチ西壁面では貝層の南端から急激に厚さを増していく様子が、北壁面では貝層が20°～30°の傾斜をもって、層厚約1mの厚さで堆積している状況が看取された。

貝層中からはおびただしい量の獣骨が出土した。ほとんどがシカとイノシシの骨で、タヌキ・ノウサギ

	第1群土器	第2群土器	第3群土器	第4群土器	第5群土器	不明
表土	2	63		9	1	5
黒色土層	1	88	1	5	2	1
貝層周辺		3				
貝層上面		6				
貝層中	9	174				
貝層下土層	1	7				
総数	13	341	1	14	3	6

表3 9トレンチ出土縄文土器個体数



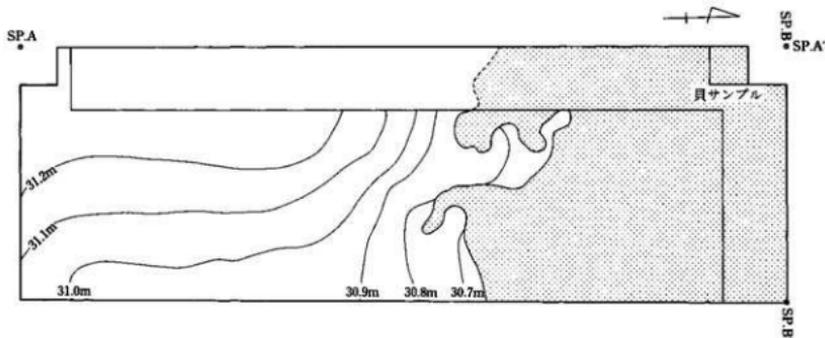
第7図 鶴崎貝塚トレンチ配置図

等の小動物の骨も少量認められた。土器は総数183点出土し、いずれも撚糸施文の第1群土器と無文の第2群土器で、これより新しい時期の土器は貝層からは全く出土しておらず、貝層の時期は西村報文のとおり、第1群土器と第2群土器の時期であったことが追認された。しかし、貝層の層位区分から土器の明確な差異を抽出することはできなかった。貝層の下面には混貝土層があり、さらに下には暗褐色土層が堆積していたが、サブトレンチ幅が50cmと狭かったため、完全に掘り抜くことができず、遺物の層位による差異を明らかにすることはできなかった。

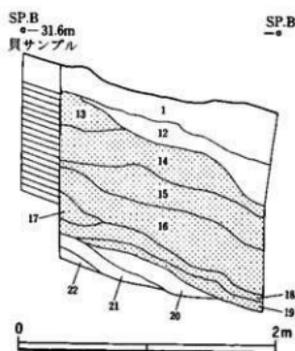
#### 土器 (第11・12図)

縄文土器は378点出土したが、その内訳は表3に示した。以下層位ごとに説明を加えるが、縄文土器の分類基準は本文IIIに示した基準に準拠する。

1～10は表土からの出土である。1は棒状工具による明確な沈線を有し、口縁は弱く外反する。2は橙褐色をなし、口唇が平坦で、口縁に横位の削り痕が有り、若干薄くなる。3は器壁が薄く、口唇が平坦で、



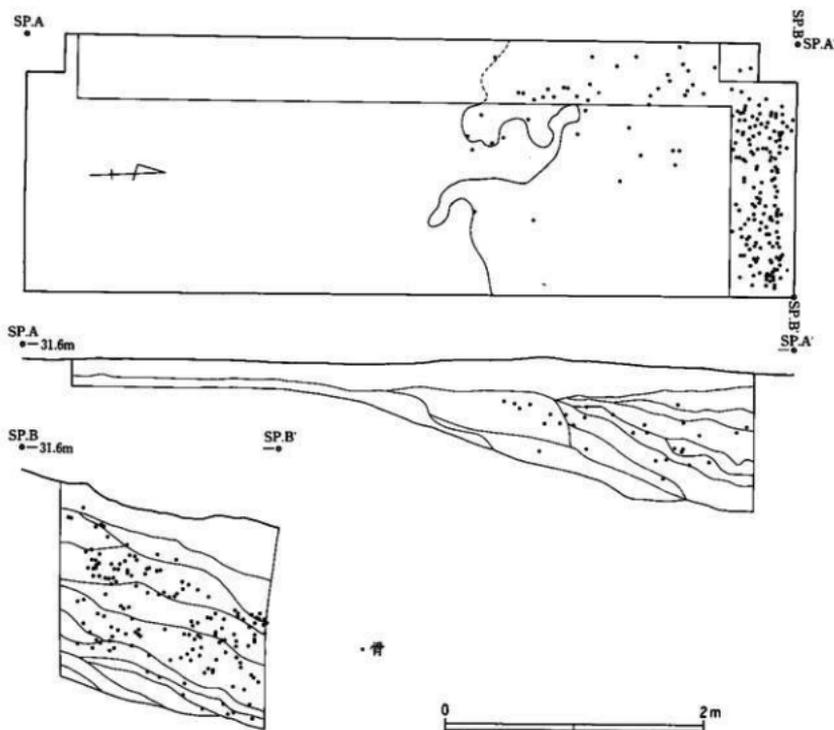
- 1層 表土 (暗褐色土で、貝殻・砂質土が混じり、簀竹根の侵入痕著)
- 2層 混土貝層 (破砕貝多く、混土率高い。塊孔の可能性有り)
- 3層 混土貝層 (完形貝多く、混土率高い。炭化物少々含む)
- 4層 純貝層 (完形貝多く、暗褐色土が混じり、炭化物・灰が多く含まれる。貝は傾斜に沿って堆積する)
- 5層 混土貝層 (炭化物が少々含まれ、暗褐色土は4層より明るい)
- 6層 混土貝層 (ややしまりを有し、混土率高く、完形のヤマトシジミはまばら)
- 7層 混貝土層 (暗褐色土に、破砕貝が混じり、炭化物・塊土粒を少々含む)
- 8層 暗褐色土 (ローム粒を多く含む、破砕貝・炭化物が少々認められる)
- 9層 褐色土 (しまり有り、ローム粒を多く含む、遺物を若干含む)
- 10層 暗褐色土 (しまり有り、ローム粒を多く含む、遺物の包含はほとんど認められない)
- 11層 褐色土 (しまり有り、砂質土で、遺物は包含しない)
- 12層 褐色土 (しまり有り、ローム粒を多く含む、破砕貝が少々混じる)
- 13層 混土貝層 (混土率高く、炭化物を少々含む)
- 14層 純貝層 (完形貝多く、炭化物・灰を多く含む、断面からの崩落が顕著)
- 15層 混土貝層 (混土率高く、炭化物・灰を少々含む)
- 16層 混土貝層 (混土率高く、炭化物を多く含む)
- 17層 混貝土層 (暗褐色土に、破砕貝が混じり、ローム粒を多く含む)
- 18層 混土貝層 (混土率極めて高く、破砕貝が多い。色調はやや明るい)
- 19層 混土貝層 (混土率がさらに高まる)
- 20層 混貝土層 (しまり欠く、破砕貝が混じり、ローム粒を多く含む)
- 21層 暗褐色土 (しまり欠く、色調明るく、異様な貝片が混じる)
- 22層 褐色土 (しまり欠く、貝片は含まれない)



第8図 9トレンチ実測図

口縁直下が横位になでられ、弱く窪んでいる。4は口唇が平坦で、口縁直下が外反し、以下は浅い幅広の溝状をなす。5は熱系土Rの縦回転施文である。6・7・9は田戸下層式で、6・7は横位の沈線、9は条痕が施される。8は子母口式で、若干繊維を含み、口唇と表面に角頭状工具による連続刺突文が施される。

11~20は貝層上の黒色土層からの出土である。11は口縁直下が外反して尖鋭となり、口唇がやや平坦に作出される。12は棒状工具による明確な沈線を有し、口縁は弱く外反する。13は口縁が内削ぎ状で、口縁直下が削り出され、段を有する。14は口唇が平坦で、口縁直下が外反し、溝状をなす。15は口唇が平坦、16は口唇が平坦で弱く外反し、17は口縁が薄く、口唇が平坦に作出される。18は10トレンチ出土の第16図



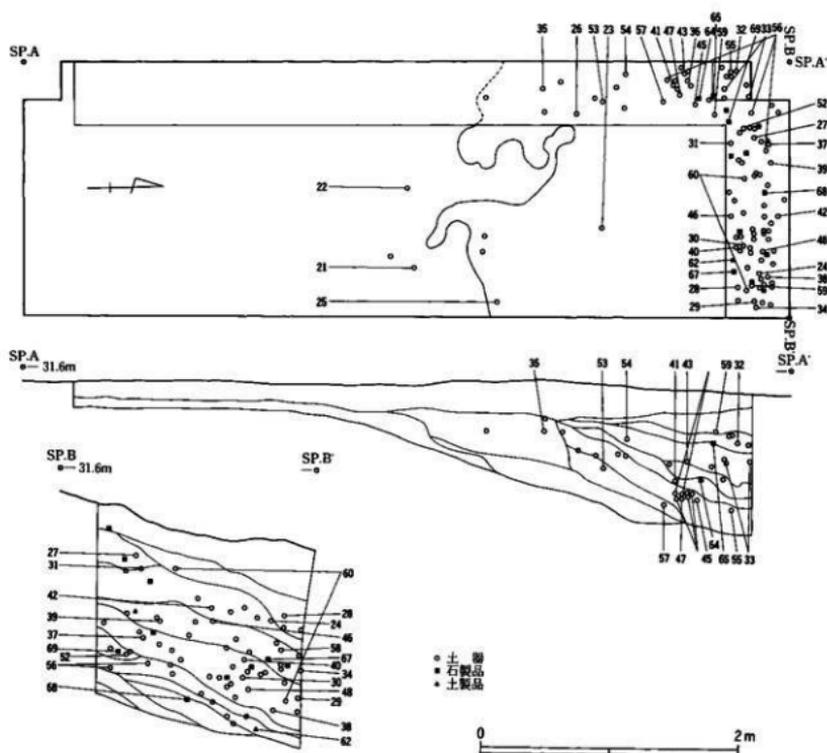
第9図 9トレンチ動物遺存体出土状況図

17と同一個体で、粗雑な沈線を口縁部に横方向、以下に網目状に施文する。三戸式から田戸下層式に位置付けられよう。19は田戸下層式で、口唇部が平坦で、縦位の細い沈線が施される。20は子母口式で、口唇と口縁直下に半截竹管状工具による刺突が施される。

21・22は貝層周辺の褐色粘質土から出土したもので、21は口唇が弱く面取りされ、やや平坦で、22は丸棒状の口唇に、切込みが加えられ、器表には縦位の擦痕を強く残す。

23～26は貝層上面からの出土である。23は口唇がやや平坦で、口縁は1.5cm幅で弱く削り出され、段を有する。25は口唇は平坦で、RLの異方向回転施文により、浅い羽状縄文が施される。26は明確な屈曲を有する平底で、器表は平滑で縦位の削り痕を有し、底部付近は横位に研磨される。胎土は細砂粒を多く含み、白色粒子が顕著で、調整手法と合わせて考えると、第2群土器に近似する。

27～60は貝層中からの出土である。27は棒状工具による沈線を有し、器表に研磨が加えられるが、沈線内までは及んでいない。口唇はやや内削ぎ状をなす。28は鋭利な沈線を施し、沈線内は丁寧なナデ調整が加えられ、口唇はやや平坦となる。29は丸棒状の口唇に、1.1cm幅の凹線が巡らされる。30は口唇がやや平坦で、口縁直下に1cm幅の凹線を有する。31は口唇が平坦で、口縁が尖鋭になり、直下に0.8cm幅の凹線が巡らされる。32は口唇が尖鋭となり、強く外反する。33・34は口唇が平坦に張り出し、口縁直下が外反す

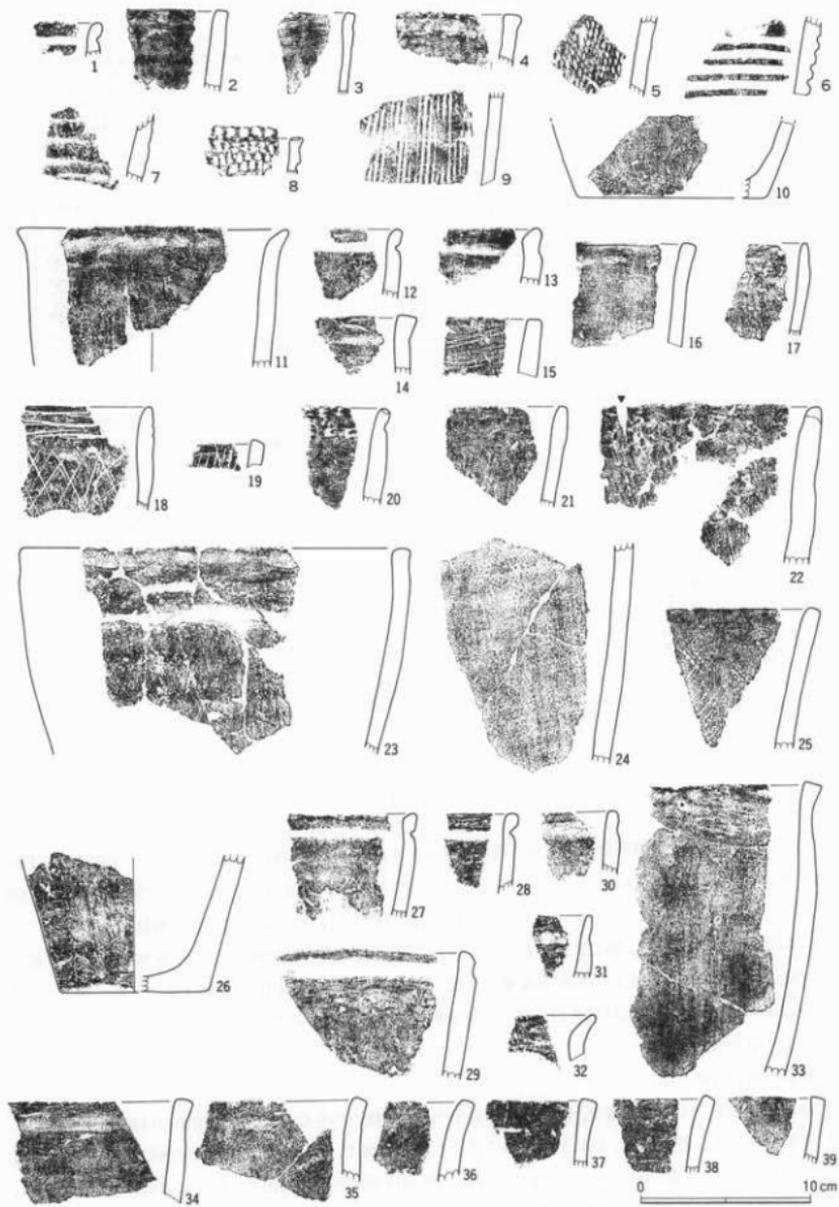


第10図 9トレンチ遺物出土状況図

る。33は口縁直下に指頭痕を残し、34は浅い溝状をなす。35~38は口唇が平坦ないしやや平坦で、口縁が弱く外反する。39は口唇が平坦で、直口する。40~49は口唇が弱く面取りされ、平坦で直口する。41は褐色をなし、口縁直下が弱く削られて、わずかに段を有する。43は口唇に弱い切込みと補修孔を有する。50・51は口唇が丸棒状をなし、胎土に細砂粒を多く含む。52~54は撚糸文Rの縦方向回転施文の土器である。52・53は同一個体で、胎土に白色粒を多量に含む。55はLRの縦方向回転施文の土器で、縄文施文は1点のみの出土である。58・60は第2群土器の底部資料である。58は平底で内面は凹凸に富み、60は丸底で縦位の削り痕を残している。

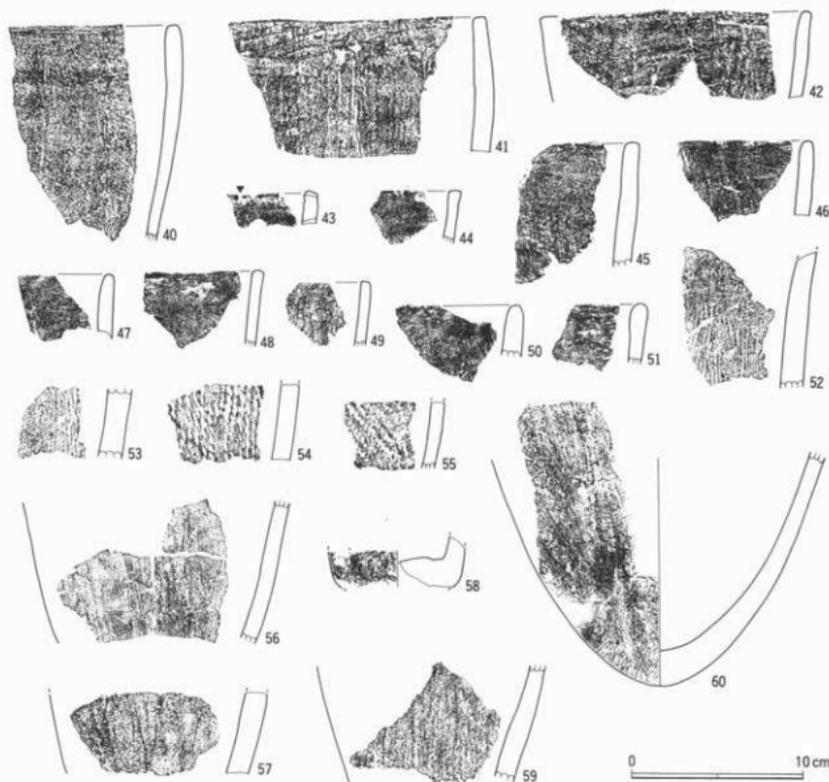
#### 土製品 (第13図61~63)

第13図61は手づくねの土器で、黒色土層から出土した。楕円形をなし、器表に指頭の痕跡を明瞭に残す。早期前半の所産と思われる。62は貝層中から出土した粘土塊で、鼻と思われる明確な刺突と、眼と思われる弱い窪みを有し、顔面を表現した可能性がある。色調は褐色から暗褐色で、胎土には微砂粒を多く含み、白色粒子が顕著で61の胎土に類似する。貝層からの出土であることから早期初頭に位置付けられよう。63も貝層から出土したりボン形の土製品で、指頭痕を残す。色調は暗橙褐色をなす。



1~10：表土、11~20：2層（黒色土）、21・22：貝層周辺、23~26：貝層上面、27~39：貝層中

第11図 9トレンチ出土土器（1）



40～60：貝層中

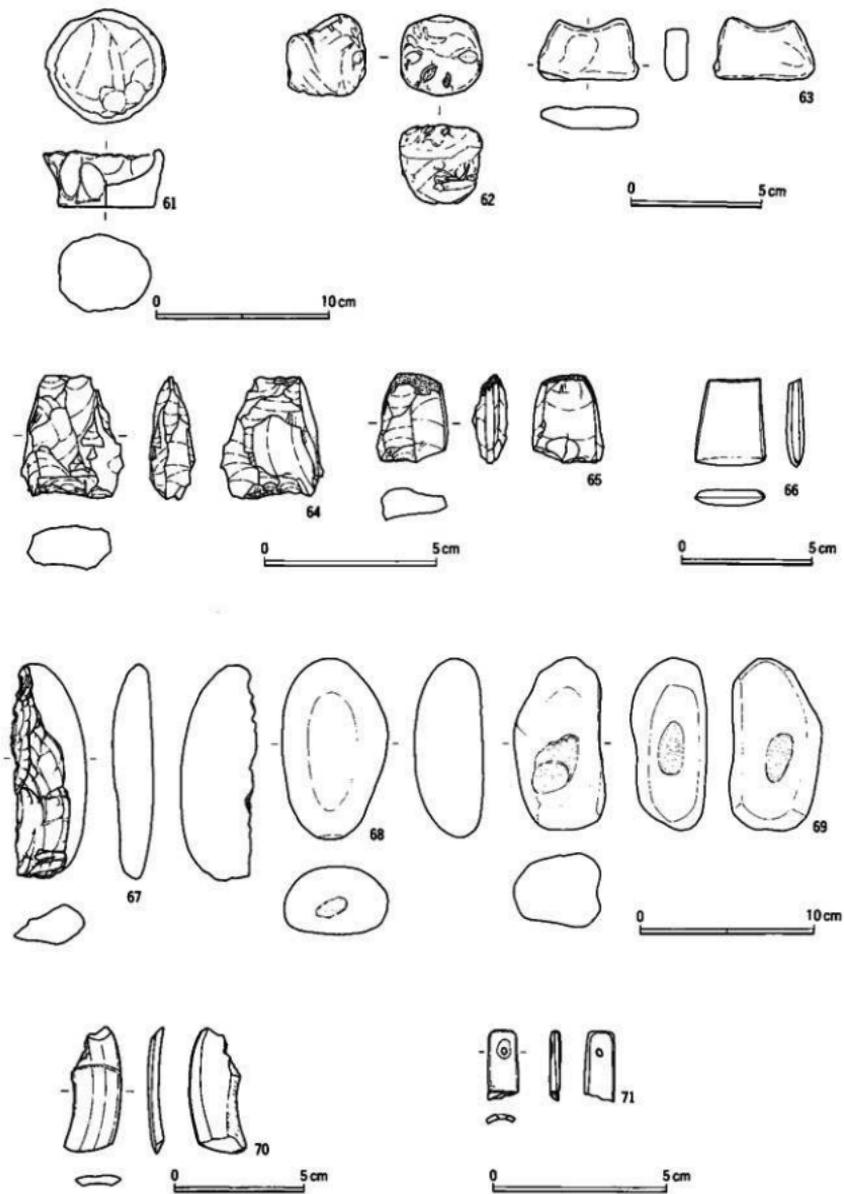
第12図 9トレンチ出土土器（2）

#### 石器（第13図64～69）

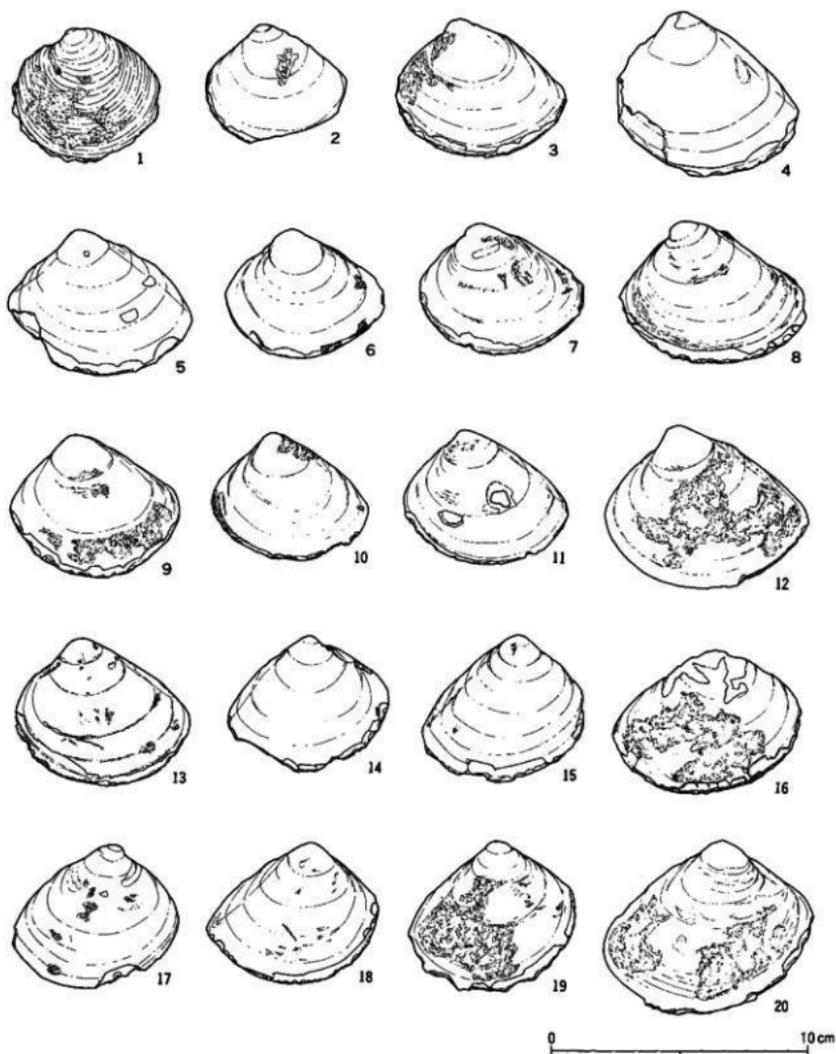
9トレンチからは総数98点の石が出土した。そのうち貝層中からは33点出土し、フリイクと礫が多い。石器と認定できたのは、図示したものに限られる（66のみ黒色土層出土）。64・65はチャート製の楔形石器で、両端に細かい調整が認められる。67は礫器であり、68は先端に、69は側面に敲打痕を有する敲石である。

#### 骨角製品・貝製品（第13・14図、図版8・11）

9トレンチで出土した骨角製品は3点で、いずれも貝層中からの出土である。第13図70は牙斧で、雄イノシシの犬歯を利用し、一方に付刃したもので、現存の長さは4.8cm、幅1.8cm、重さ3.7gで、基部が欠損している。71は骨製の垂飾品で、先端の形状はわからないが、穿孔され、下端に横方向の溝が施され、表面は研磨されている。現存の長さは2.1cm、幅0.8cm、重さ0.3g。ほかに断面を研磨した骨製品が出土している（図版8）。貝製品はすべて貝刃で、総数で30点出土した。カガミガイが1点あるほかは、すべてハマグリで、現地でのフルイがけの際に検出された。



第13図 9トレンチ出土土製品・石器・骨角器



第14図 9トレンチ出土貝刃

(2) 10トレンチ (第15図)

貝塚の下端の範囲を確認するため、当初10m×2mで設定した。しかし、貝層面までは深くかなりの土量が生想定されたため、表土下半から幅を1mに変更して、調査を進めた。貝層はトレンチ西端で地表下1.2m、末端部で地表下2.1mの深さで検出され、約25度の傾斜をもって堆積していた。今回の調査は貝層

を確認した段階で終了したため、貝層の厚さは正確には把握できなかったが、ボーリング探査によりトレンチ西端では60cmの層厚が想定された。また、末端部分はボーリングでの感触が得られず、表面の貝層が崩れて流れたものと判断された。貝層の表面の観察でも、貝塚本体は貝層に混じる土壌が黒色であるのに対し、末端では色調がやや明るくしまりを欠いており、流れた貝層を識別することができた。

貝層上面には厚い黒色土層が堆積している。表土から3層までは土師器が多量に含まれ、古墳時代以降の堆積土である。5層は土師器も少々含まれていたが、田戸下層式と植房式が多く出土し、早・前期の包含層を形成している。貝層直上に堆積する6層には、田戸下層式が多量に含まれ、貝層上面に張り付くように出土した大破片も認められた(第15図)。9トレンチで確認された黒色土層に相当する層で、早期前半の包含層である。

#### 土器(第16・17・18図)

10トレンチからは縄文土器が765点、古墳時代以降の土器は1,256点出土した。本トレンチは貝層を掘り下げていないので、すべて貝層上の出土で、第2群とした無文土器と第4群とした田戸下層式が卓越するが、無文土器として一括した第2群は、口縁部資料が極めて少なく、ほとんどが第4群に伴う無文土器と考えられる。

#### 第1群土器 燃糸施文の土器(第16図1・2・12・13)

1・2は口縁直下にRの側面圧痕を有し、体部は無文となる。12は燃糸文Rの縦位、13はRLの異方向回転による羽状縄文で、いずれも胎土に白色粒子が顕著に認められる。

#### 第2群土器 無文土器(第16図3~11)

3~5は口唇が平坦で、口縁直下が外反し、以下が浅い幅広い溝状をなす。6は口縁が弱く張り出し、口唇が平坦となる。7~11は口端が平坦で、いずれも良く研磨されている。

#### 第3群土器 三戸式土器(第16図14~31)

14は口縁部が大きく外反し、先端の尖った口唇には丸棒状工具を利用した刻みが施される。15は内削ぎ状の口縁をなす。口唇には斜め方向の刻み、口縁には細沈線が横位・斜位に施文される。16は器壁が薄く、口縁付近が外反する。文様は棒状工具による横位の沈線が密に施文されている。色調は明褐色をなす。17は粗雑な沈線を口縁に横方向、以下に網目状に施文する。胎土には白色粒子を大量に含む。三戸式から田戸下層式に位置付けられる。19は口唇外側、口縁に粗雑で浅い横位の沈線が観察され、胴部に斜方向の沈線が1条施文されている。20は無文の土器である。内面には擦痕が残る。21は口唇に斜方向の刻みを施す。外面には横方向の擦痕地に、棒状工具を4本1組にしたもので短条痕を施文している。内面は丁寧なナデにより平滑である。22・23・24は平行沈線とその間に充填される網目状沈線により、幾何学状文が描出される。25はアナグラ風貝殻縁圧痕を網目状に施文する。26は縦方向の浅い条痕地に、横位の半截竹管文

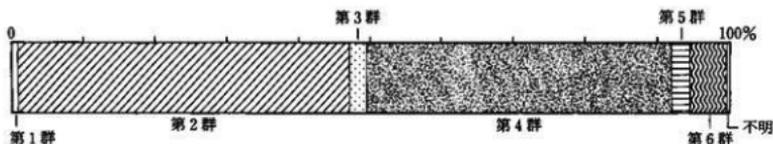
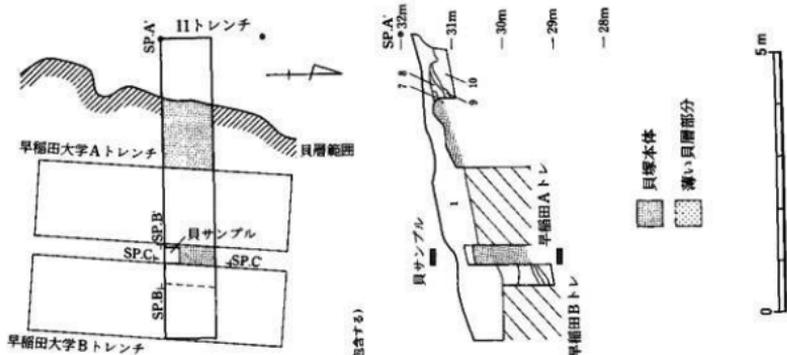
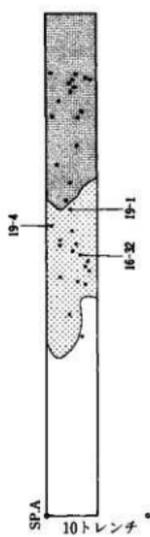


表4 10トレンチ出土土器群別数量比

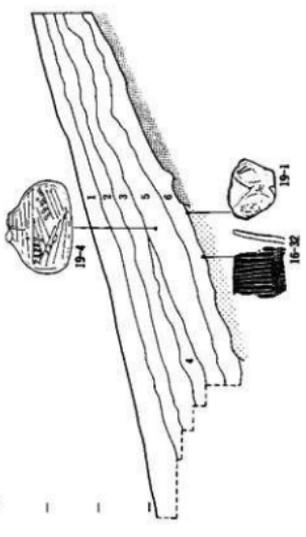


早稲田大学Bトレンチ

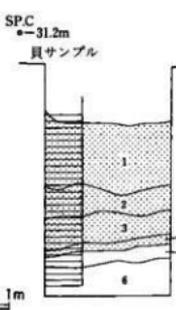
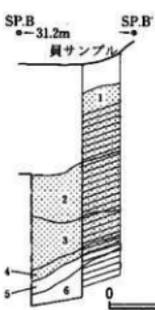
貝サンプル  
早稲田Aトレ  
早稲田Bトレ



- 土 (観察員が鑑じる)
- 1層 褐色土 (観察員が鑑じる)
  - 2層 黒色土 (しまり有り、炭化灰・焼土灰を多く含む、土層層を包含する)
  - 3層 暗褐色土 (しまり有り、ローム灰・焼土灰を多く含む、土層層を包含する)
  - 4層 黒色土 (しまり有り、ローム灰・焼土灰を多く含む)
  - 5層 暗褐色土 (しまり有り、ローム灰・炭化灰を多く含む、焼土灰・炭層の土層を包含する)
  - 6層 黒色土 (炭化灰を多く含む、ローム灰・焼土灰を多く含む、観察員が少々鑑じる)
  - 7層 暗褐色土 (観察員が鑑じる)
  - 8層 暗褐色土 (観察員が少々鑑じる)
  - 9層 暗褐色土 (観察員が少々鑑じる)
  - 10層 暗褐色土 (観察員が少々鑑じる)



- 1層 焼土貝層 (焼土率高く、炭化物を多く含む、灰が鑑じる)
- 2層 焼土貝層 (1層に比し焼土率高く、色調が暗く、炭化物・灰を少々含む)
- 3層 純貝層 (炭化物・灰を多く含む、ヤマトレジミを主体とするが、部分的にハマグリ・マガキがブロックを呈し、断面からの剥落が顕著)
- 4層 焼土貝層 (焼土率高く、貝の破砕が進行し、炭化物を多く含む)
- 5層 暗褐色土 (しまり欠く、観察員が鑑じり、ローム灰を多く含む)
- 6層 暗褐色土 (しまり欠く、色調は明るく、ローム灰を多く含む)



第15図 10トレンチ・11トレンチ実測図

を浅く施文する。28～31は同一個体である。沈線を網目状に施文するが、乱雑に行っているため、間隔は一定しない。三戸式から田戸下層式に位置付けられる。27は底部破片である。尖底をなし、沈線文が乱雑に施文されている。色調、胎土については特に記したものの以外、灰黄褐色から極暗褐色をなし、細砂粒をやや多く含んでいる。焼成はいずれも良好である。

#### 第4群土器 田戸下層式土器 (第16図32～50, 第17図51～103)

1類 沈線文、刺突文を有するもの (32～79・98・99)。32・35は縦位の沈線文を口縁から胴部上半にかけて施文する。32は横位3条の細沈線文によって胴部上半を区画し、その下に再び縦位の沈線文を施文する。33・34・36は口縁付近に横位の沈線文を施文する。33は口縁が外反しながら肥厚している。37～52・55・56は横位、縦位、斜位の沈線文を施文する胴部破片である。39・40は横位と斜位のものを組み合わせている。43は浅い横位の沈線文が粗雑に施文される。胎土には直径1mmほどの小石及び雲母粒を多く含む。色調は淡灰褐色をなす。この胎土、色調は本群の中でも異質で、三戸式の可能性もある。53・75・76は沈線文と刺突文を施文する。53は縦位の沈線文間に刺突列を施文する。75・76は横位の細沈線文間に半載竹管による刺突列を施文する。54・57・58・60～74・78は細沈線が密に施文される。57は口縁がやや外反し、角頭状の口唇に斜位の細沈線を施文する。59は口縁がわずかに外反しながら肥厚し、口唇に縦位の細沈線を施文する。58は縦位、斜位の細沈線文を組み合わせて、矢羽状の文様を描出する。64・70・71・73はやや太めの沈線文と組み合わせている。77はやや太めで横位の沈線文間に細沈線を網目状に施文する。79は口縁に円形竹管文を施す。98・99は底部に近い破片で、98は縦位の、99は横位の沈線をそれぞれ施文する。色調、胎土は特に記したものの以外は黒褐色から黄褐色をなし、砂粒を少量からやや多く含んでいる。焼成は良好である。

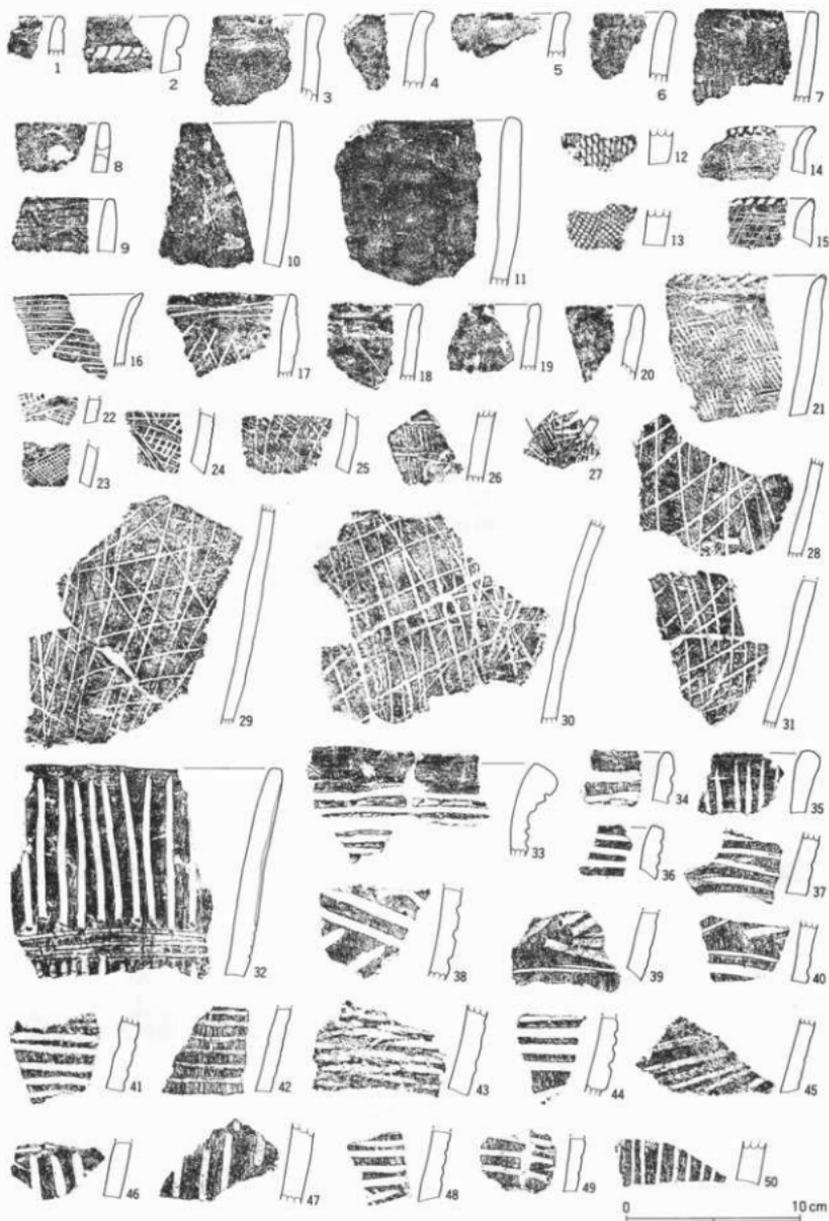
2類 貝殻文を施文するもの (87～97)。いずれもアナグラ属貝殻腹縁文を細沈線文と組み合わせて施す。色調は黒褐色から明褐色をなし、胎土は砂粒をやや多く含む。焼成はいずれも良好である。

3類 無文、条痕文のもの (80～86)。80・81は無文である。80は内外面に擦痕調整を施す。色調は灰褐色をなし、胎土に砂粒をやや多く含む。81は器表面が荒れており、ざらついている。外面には指頭圧痕を顕著に残す。色調は黄褐色をなし、胎土には砂粒、小石を多く含む。82～86は条痕文を施す。82・85はほぼ器面全面に、83・84・86は4本～6本を単位とする工具により、帯状に施文する。色調は褐色から黒褐色をなし、胎土は砂粒を多く含む。

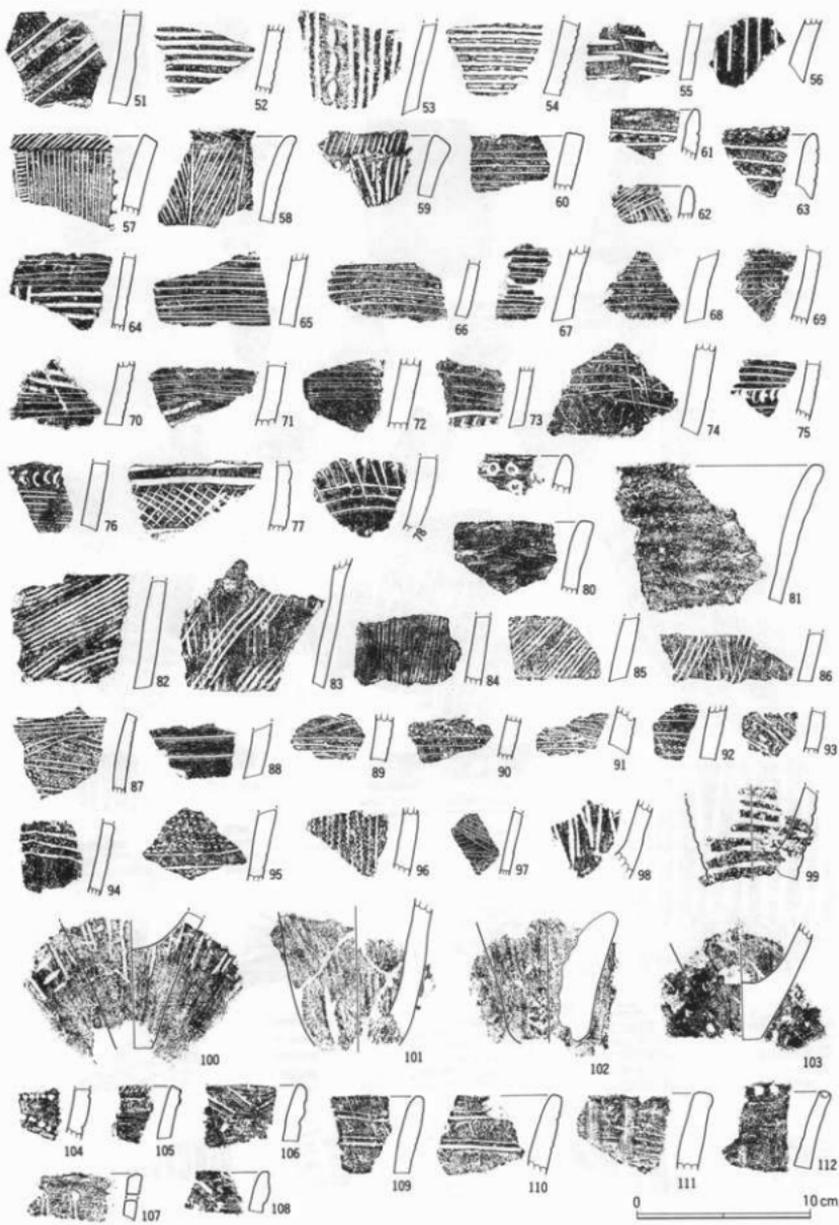
4類 底部 (100～103)。100・102・103はいわゆる「天狗の鼻」状をなすものであるが、先端部はいずれも欠損している。100は破片上部に縦位の沈線を施文する。器表面は縦方向のケズリ調整がみられる。102・103は欠損部が多いが、100と同様の形状になると思われる。いずれも、器表面には縦方向のケズリ調整がみられる。101はやや丸みを帯びた底面になると思われる。102の外面は激しく二次焼成を受け、色調が灰白色化している。いずれも胎土は砂粒を多く含む。

#### 第5群土器 田戸上層式・子母口式土器 (104～112)

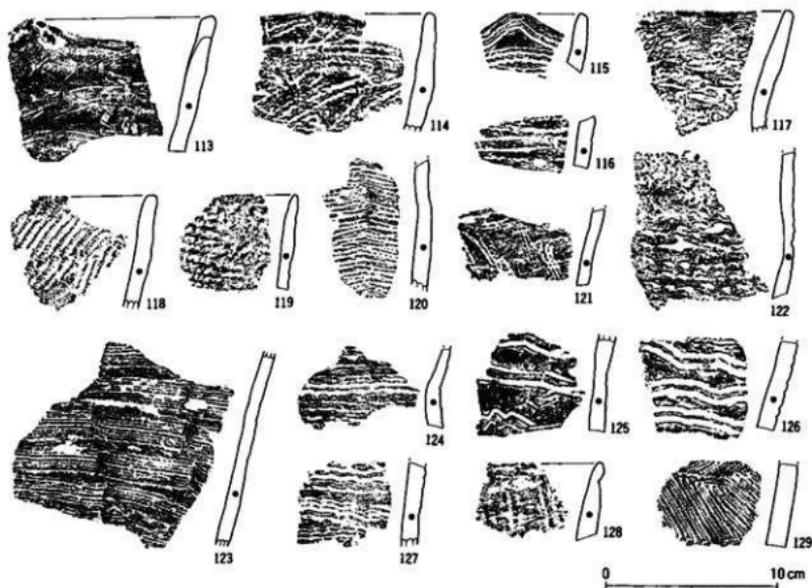
104は角頭状工具による押引文を施す。105は口唇端部及びその下に刻みのある細隆線を横位に施す。口唇には刻みがみられる。106・108は同一個体である。口唇直下に沈線文を鋸歯状に施し、その下に刺突列がみられる。107は口縁に裏面へ貫通する円形刺突文を施し、各刺突から半載竹管を用いた浅い沈線を垂下させる。109・110は同一個体である。口縁に2条の半載竹管による浅い沈線文を横位に施す。111は横方向の擦痕地に縦位の太く、浅い沈線文を施す。112は口唇に斜め方向からの刺突文を施す。内面は横方向の擦



第16図 10トレンチ出土土器(1)



第17図 10トレンチ出土土器(2)



第18図 10トレンチ出土土器(3)

痕が顕著に残る。いずれも胎土には砂粒を多く含み、器表面はざらつく。色調は黒褐色から褐色をなす。

#### 第6群土器 植房式土器 (第18図113~128)

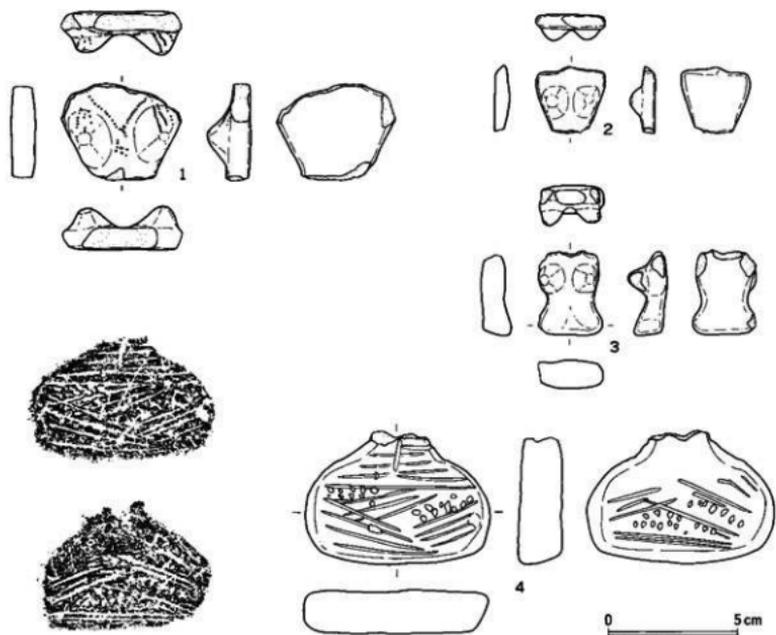
113は波状口縁をなし、条痕が施される。114・116・117, 119~121は燃糸文の土器で、Rの燃糸文が多いが、121はLと併用される。118は縄文の土器で、115・123~127は櫛歯状、平行線文の土器である。115は押し引き痕を有し、122は半截竹管状工具で、刺突列が施文される。

#### 土製品 (第19図)

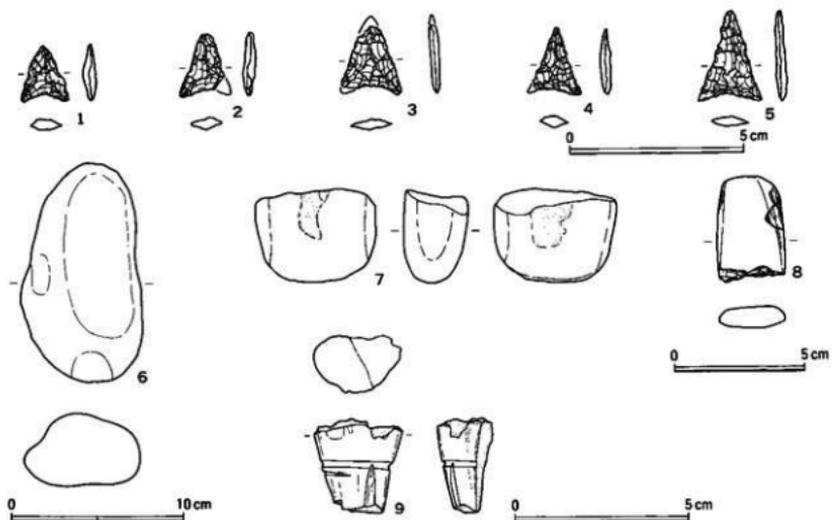
10トレンチからは4点の土偶が出土した。1は逆三角形の平板状で、上端・下端が欠損し、重量は24.7gである。暗褐色を呈し、胸部に細かい刺突列による文様が施され、表面は丁寧になでられる。2は逆三角形の平板状で、下端が欠損し、重量は5.6gを測る。上端に弱い突起を持ち、表面は本来暗橙褐色であるが、剥落が著しく、胸部や側面は褐色となっている。3は分銅形で、重量は9.9gを測る。褐色をなし、上端を欠損する。腰部は指頭により括れが作出され、胸部は高く擠み出される。表面は丁寧になでられる。4は三角形の平板状で、上端を欠損し、分銅形をなすかどうか定かでない。褐色で、重量は80.9gを測る。表裏面ともに細沈線と刺突による幾何学的文様が加えられ、丁寧になでられる。1~3は6層、4のみ5層からの出土で、4は三戸式から田戸下層式期に位置付けられる。

#### 石器・骨角製器 (第20図)

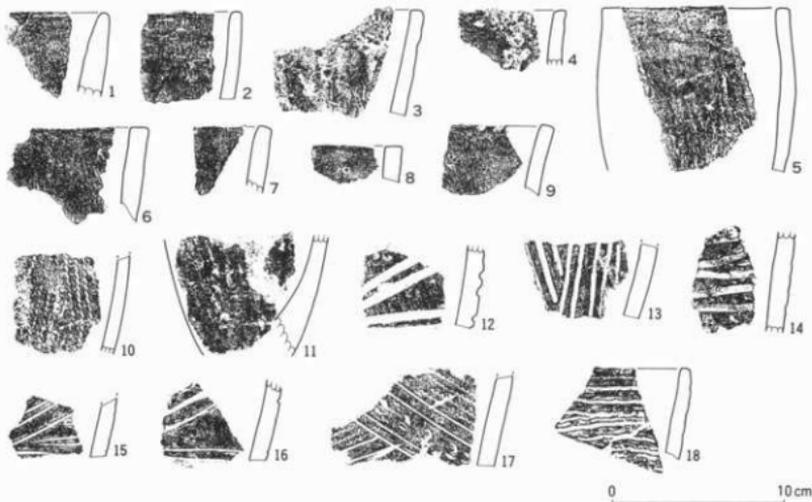
1~5は石鏃である。6・7は敲石で、6は先端、7は両面に敲打痕を有する。8は小型の磨製石斧で、先端を欠損する。9は横位の溝が施される骨製品である。先端の剥離の状況から、若獣骨と推測される。



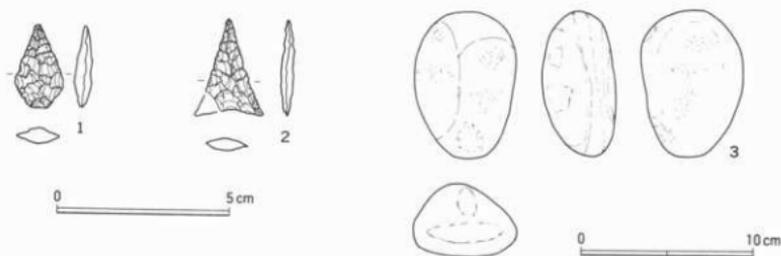
第19図 10トレンチ出土土製品



第20図 10トレンチ出土石器・骨角器



第21図 11トレンチ出土土器



第22図 11トレンチ出土土器

### (3) 11トレンチ (第15図)

11トレンチは貝層上端と早稲田大学調査区を明らかにすることを目的に、10トレンチの延長上に6m×1mで設定し、11トレンチとの間には1mのベルトを残した。貝層上端は表土直下で検出され、早稲田大学トレンチは上端から1.5mの地点にAトレンチ(幅1.5m)、40cm幅のベルトを置いて同幅のBトレンチが確認された。調査前、表面に畝状の高まりが2条認められていたが、11トレンチの調査の結果この高まりが早稲田大学トレンチに一致しており、表面でもある程度位置を把握することができた。今回は早稲田大学のBトレンチを再度掘起こして、ベルト部分での貝のコラムサンプルの採集を計画した。しかし、Bトレンチの西壁貝層は完全には掘りきってはならず、50cm幅で貝層下まで掘り抜いた上で、採集を実施した。その際出土した土器が第21図3・5～7・9・11で、9トレンチ同様獣骨も多量に出土した。このサブトレンチ以外の調査は、貝層検出面で止めており、ほかの土器はいずれも表土から出土したものである。

### 3 鶴崎貝塚9トレンチ採集の動物遺存体

小宮 孟

#### (1) 資料と方法

今回筆者は、鶴崎貝塚確認調査で採集された動物遺存体について調査する機会を得た。資料は、発掘中に1cm目の乾式メッシュを併用して肉眼的に発見したものと、コラムサンプルから水洗分離したものの2種類である。資料量は非常に多く、短期間に調査を完了することは不可能である。今回は、同定が終了した前者のうち、9トレンチからの採集資料について概略を報告する。

なお、発掘担当の高柳によると、遺存体資料はいずれも花輪台II式並行の無文土器に伴うもので、所属時期は縄文時代早期初頭と推定される。

#### (2) 結果

今回までに、以下の動物が同定できた。

貝類	オオタニシ <i>Cipangopaludina japonica</i>	鳥類	カモ科種不明 <i>Anatidae gen. &amp; sp. indet.</i>
	マガキ <i>Crassostrea gigas</i>	哺乳類	ノウサギ <i>Lepus brachyurus</i>
	シジミ属 <i>Corbicula sp.</i>		テン <i>cf. Martes melampus</i>
	ハマグリ <i>Meretrix hisoria</i>		イヌ科種不明 <i>Canidae cf. Vulpes</i>
魚類	スズキ属 <i>Lateolabrax sp.</i>		タヌキ <i>Nyctereutes procyonoides</i>
	クロダイ属 <i>Acanthopagrus sp.</i>		イノシシ <i>Sus scrofa</i>
	マダイ <i>Pagrus major</i>		ニホンジカ <i>Cervus nippon</i>

貝類は、シジミ属が各貝層を通じて最も同定頻度が高く、この貝塚貝層の圧倒的な優占種である。シジミ属は *Corbicula japonica* もしくはマシジミ *Corbicula leana* に由来すると思われるが、属以下の同定はできない。海産貝類の頻度はきわめて低く、種構成も単調である。

魚類及び鳥類の頻度は低く、今後、コラムサンプルからの分離資料の追加分を考慮しても、貝層中に高い密度で魚骨と鳥骨が堆積している可能性は低いと予想される。

哺乳類は、貝類を除くと最も大量に出土した動物遺存体である。9トレンチから採集した資料は、総重量は約4,550gに達した。観察可能な資料には、ほとんどすべて古いスパイラル骨折が認められる。その内訳は、シカ190点約2,235g（下顎骨3，脊椎骨17，肩甲骨7，上腕骨13，尺骨1，橈骨12，中手骨16，手根骨9，寛骨4，大腿骨21，膝蓋骨1，脛骨14，中足骨19，距骨4，踵骨8，足根骨9，基節骨14，中節骨6，末節骨5，中手骨もしくは中足骨7），イノシシ108点約610g（下顎骨3，脊椎骨11，肩甲骨3，上腕骨2，尺骨5，橈骨4，中手骨6，手根骨6，寛骨4，大腿骨1，膝蓋骨3，脛骨7，中足骨7，距骨1，踵骨5，足根骨3，基節骨9，中節骨8，末節骨5，中手骨もしくは中足骨15），タヌキ8点約13g（下顎骨2，脊椎骨4，上腕骨1，橈骨1），その他の哺乳類3点約2g，同定が困難な破片資料約1,670gである（シカ前肢、後肢の一部は表5・6を参照）。なお、シカとイノシシの遊離歯と破片が10数点ずつ出土しているが、数量化が難しいので今回はこの中に含めなかった。

資料数ではシカが最も多く、イノシシがこれに次ぐ。両者の数量比は約2：1である。骨格構成の違いによる影響が少ない重量比較では、両者の比は約3.5：1である。西村・金子（1960）の調査結果とはやや傾向を異にするが、後者が今回の調査部分の実体をよく反映すると思われる。

一方、哺乳類遺存体各部位の回収率をみると、シカ、イノシシとも頭骨と脊椎骨の回収率が低く、シカ角は回収されなかった。脊椎骨の回収率の低さには、破損しやすい構造的な特徴や解体調理法などの影響も考慮すべきかもしれない。頭骨が調理その他の目的で故意に壊されたとしても、歯は残存する。しかし、肢骨の頻度から期待される遊離骨の回収率が非常に低いことから、シカ、イノシシとも頭骨は胴体から切り離され、そのほとんどが貝層以外の場所で処理された可能性が高い。

番号	同定部位	重量(g)	BT	Bd	BG	LG	SLC	備考
125	肩甲骨 関節部	左	21.8					
151	稜部片	—	1.6					
206	関節部	左	12.8		29.5	34.2		
211	関節部	右	7.7		31.5			
239	関節部	—	5.1					
246	関節部	—	10.0					
279	関節部	右	37.5		29.5+	32.5+	29.1	
67	上腕骨 骨幹部	右	13.8					
117	近位部	左	10.2					骨端線から剥離
123	遠位端	右	35.7	42±				
138	滑車部	左	12.4					
192	近位骨頭	左	11.1					骨端線から剥離
277	近位端	左	7.1					
282	近位端	右	5.1					
283	遠位端	左	50.4	47.1				
283	近位端	左	23.6					
295	遠位端	左	26.0	36.7	41±			
313	遠位部	左	42.6	37.6	41.6			
271	遠位端	左	65.8	43.9	50.1			
271	遠位部	右	26.9					
番号	同定部位	重量(g)	BPC	Bp	BFp	Bd	BFd	備考
62	尺骨 近位部	右	11.3	21±				
8	橈骨 遠位端	左	48.0			40.8	36.2	
70	近位端	右	13.4	39.4	37.5			
71	近位端	右	11.0					
77	遠位部	右	18.2					尺骨遠位端が癒着
85	遠位端	右	22.6			35.9		
148	骨幹部	左	13.9					
256	骨幹部	右	12.9					
312	近位端	左	33.4	46.7	44.8			311と接合
4	骨幹部	右	5.0					
4	遠位端	右	7.5				35.2	骨端線から剥離
271	遠位端	右	4.3					骨端線から剥離
271	遠位端	左	15.2			42.6		
60	中手骨 近位端	右	9.5	29.0				
87	骨幹部	—	4.3					
113	遠位端	右	18.8					
128	近位骨幹	—	5.2					
151	近位端	右	9.0					右側に陥入痕?
167	骨幹部	—	5.2					
172	遠位端	右	12.9			31.5		鈍い骨折面
221	近位端	左	5.1					
268	骨幹部	—	8.0					齧歯類? 咬みあと
279	近位骨幹	左	2.9					
4	近位端	右	6.2					切痕1箇所
271	遠位端	右	8.1			31.0		
271	近位端	右	5.9					切痕3箇所
271	近位端	左	2.3					
271	骨幹部	—	2.2					
271	近位端	左	1.1					

BT: 滑車幅、Bp: 近位端幅、Bd: 遠位端幅、BG: 関節窩幅、LG: 関節窩長、BFp: 近位関節幅、BFd: 遠位関節幅

表5 シカ遺存体同定結果(1)

番号	同定部位	重量(g)	Bp	DC	Bd	備考		
37	大腿骨 遠位骨幹	右 9.2						
49	近位骨幹	右 5.1						
59	近位端	左 73.0	65.7	28.9				
114	骨頭部	右 10.4		27.5				
119	遠位端	右 91.7			59.9			
129	近位骨幹	右 10.6						
171	遠位端	右 35.0			42.6+			
179	骨頭部	右 9.5						
187	遠位端	右 36.2	67.6	27.3				
203	遠位端	左 45.5			53.3	習歯類咬みあと		
209	遠位端	左 30.4			57±			
247	遠位端	左 25.4				骨端線から自然剥離		
253	遠位端	右 43.9			61.0			
258	遠位端	右 8.4						
284	遠位骨幹	左 20.8						
294	骨幹部	右 8.8						
271	滑車部	左 8.2						
271	滑車部	右 4.9						
271	滑車部	右 4.2						
271	滑車部	左 7.0				骨端線から自然剥離		
番号	同定部位	重量(g)	Bp	Bd	Dd	備考		
13	脛骨 遠位端	右 13.2		32.7+				
19	遠位端	右 28.7		37.9		鋭い骨折面		
25	近位端	左 13.3						
61	遠位端	左 34.9		40.4				
76	遠位端	左 38.2		38.4				
108	遠位端	左 6.9						
109	遠位端	左 11.7		33.4				
152	遠位端	左 17.7		39.2	29.2			
160	遠位骨幹	左 4.0						
163	遠位端	右 15.0		40.4	27.6			
167	近位骨幹	右 11.1						
173	遠位端	右 31.6		40.2				
309	近位端	左 14.0	54.8			307と接合		
4	遠位端	右 4.5		36.5±				
番号	同定部位	重量(g)	GLm	GLl	Dm	DI	Bd	備考
127	距骨	右 19.1	41.5	44.7	23.5	25.7	28.7	
183		右 14.8	41.7	45.9			27.9	
4		左 16.7		40.5	24.9		27.9	
271		左 13.1	38.9	39.6			26.7	
番号	同定部位	重量(g)	GB	GL	備考			
18	踵骨 中央部	右 17.8	26.5±					
21	上部破片	左 17.2	28±					
131	上部破片	左 20.9	27.5±	93.7				
181	上部破片	左 10.8			骨端線から自然剥離			
202	上部破片	右 16.7	29±					
220	上部破片	右 16.2	31.5±					
227	上部破片	右 19.5	29.5±					
314	上部破片	右 23.9	31.5+					

Bp: 近位端幅、Bd: 遠位端幅、DC: 大腿骨頭最大径、Dd: 遠位端径、GLm: 内側最大長、GLl: 側面最大長、Dm: 内側最大幅、DI: 側面最大幅、GB: 最大幅、GL: 最大長

表6 シカ遺存体同定結果(2)

### III 早稲田大学調査の概要

#### 1 調査概要

鶴崎貝塚は昭和33年5月3日～6日の4日間、早稲田大学の西村正衛氏により発掘調査が実施され、その2年後の昭和35年7月「古代」第35号で、調査の内容が報告された<sup>1)</sup>。

西村氏は地域環境と文化の相互関係の総体的理解を得ることを主眼に、昭和25年以降利根川下流域の貝塚の組織的な調査を精力的に実施してきた。その一環として昭和29年12月神崎町所在の西之城貝塚の発掘調査が実施され、縄文最古期の貝塚として多大な成果があげられた。その後、周辺に同類の遺跡を探し求めていたところ、神崎町在住の榑逸雄氏から、西村氏のもとに鶴崎貝塚発見の報告がもたらされた。両氏が現地を踏査した結果、西之城貝塚に次ぐ古式の燃糸文系の貝塚であることが判明し、早稲田大学で発掘調査を実施するに至った。したがって、鶴崎貝塚は新発見の貝塚で、西之城貝塚の報告には登場しない。

調査当時の貝塚は桑畑となっており、表面での貝殻散布が観察され、その状況から小規模の貝塚と判断された。早稲田大学調査区は貝塚中央部に幅1.5m、長さ5mのAトレンチと、40cm間隔を置いて同幅で平行するBトレンチが開設され、北方から1.5mずつ区切って三区とされた。また、Aトレンチの北方延長上に2m四方のCトレンチが開設された。第23図には早稲田大学調査の実測図を再録したが、報告では断面図作成箇所が明示されていない。トレンチ幅や層厚から察すると、西壁はAトレンチ、東壁はBトレンチ、北壁・南壁ともにA・B両トレンチを示していると推測される。貝層は混土貝層と混灰貝層が主体となっており、その上には黒色土層、下位には褐色混貝土層の堆積が認められたが、今回の調査でも同様の状況が追認された。また、西村氏は発掘の進展に伴って、表土が厚く堆積した良好な貝層が斜面下方に向かって続いていることを指摘し、二次調査の必要性を述べていたが、今回の10トレンチの結果は、西村氏の指摘の正しさを証明したものとさえよう。

なお、昭和59年西村氏の利根川下流域研究の集大成である『石器時代における利根川下流域の研究』<sup>2)</sup>が刊行され、再び鶴崎貝塚が掲載されたが、「古代」報告と文章や図版の一部に若干の変更が認められる。

#### 2 出土遺物

第24～27図は西村氏の提示資料を再録させていただいた。土器については『古代』報告と『利根川下流域』報告で若干の差異があり、断面黒塗りは前者、白抜きは後者を示している。また、報告では出土位置が示された資料は限られるが、実際には遺物に出土位置が注記されており、表7・8にその位置を示した。

早稲田大学の調査では総数1,241点の土器が出土した(その内訳は口辺部171点、腹部1,021点、底部49点)。大部分は燃糸文系のもので、西村氏は製作、文様の点から9類に分類した。

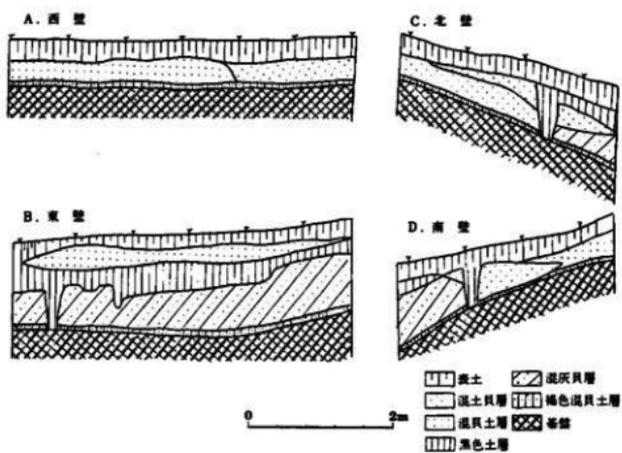
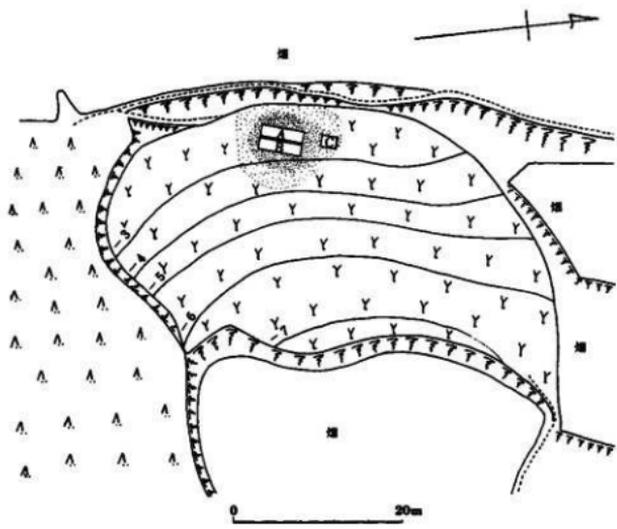
第1類：縄文が施された土器(第24図1～13) 破片総数27点。

第2類：燃糸文の土器(第24図14～41) 破片総数45点。

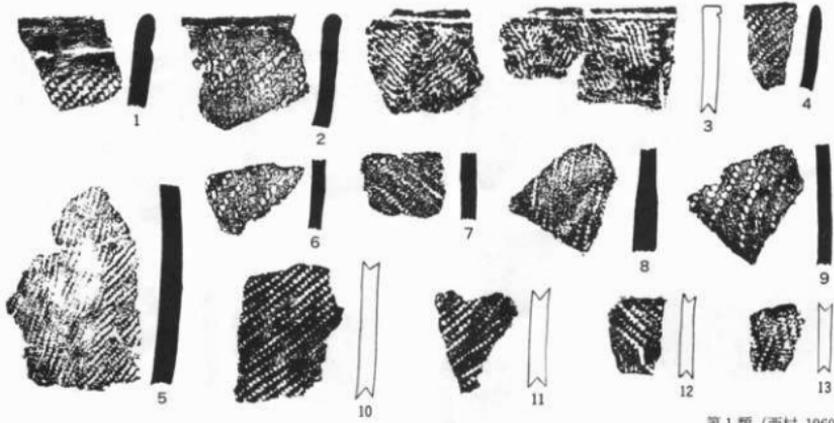
第3類 a種：無文土器で、口辺断面が円頭棒状を呈するもの(第25図42～51)

b種：無文土器で、口唇上端部がわずかに削平されたもの(第25図52～59)

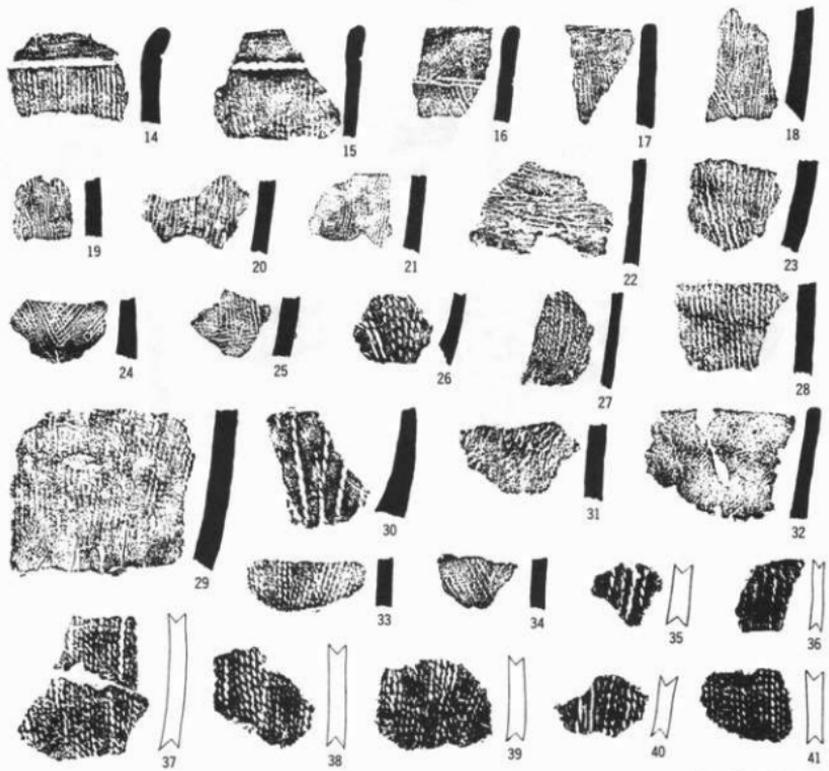
c種：無文土器で、口唇上端部の削平が顕著なもの(第26図60～75)



第23图 昭和33年早稲田大学調査夷湖園 (西村 1984)

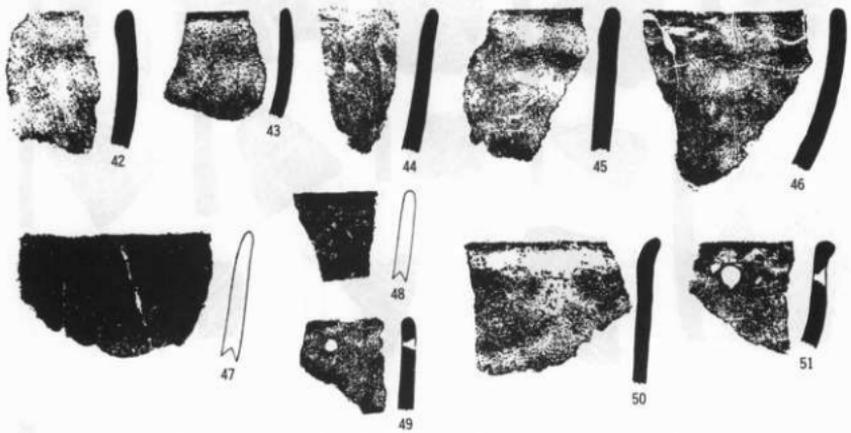


第1類 (西村 1960)

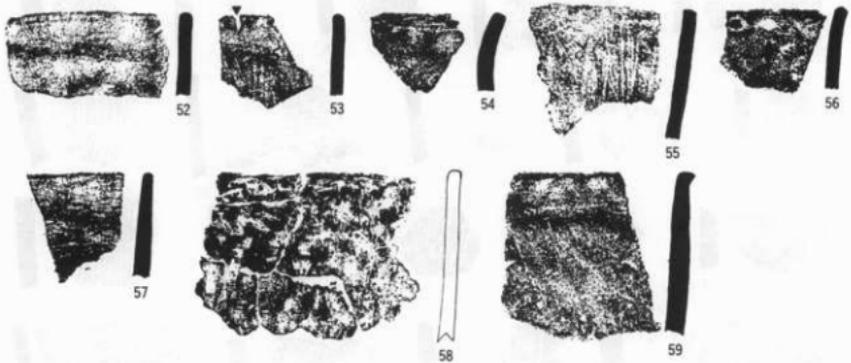


第2類 (西村 1960)

第24図 昭和33年早稲田大学調査資料 (1) 縮尺: 1/3



第3類a種 (西村 1960)



第3類b種 (西村 1960)

第25図 昭和33年早稲田大学調査資料(2) 縮尺:1/3

第4類:口縁に沈線をめぐらした土器(第26図76~84)破片総数8点。

第5類:口縁に燃糸を一条めぐらしたもの(第27図85)破片総数2点。

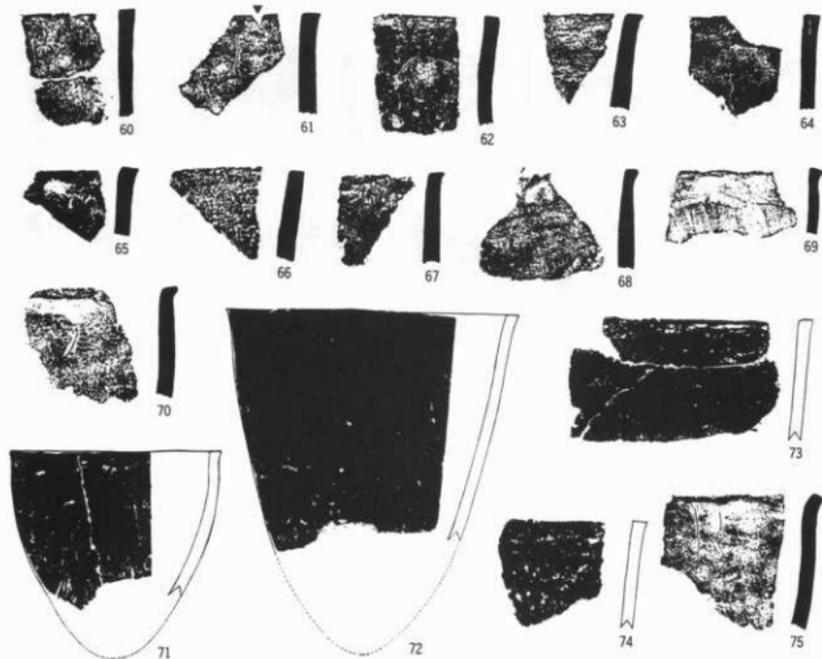
第6類:平行沈線文の土器(第27図86)破片総数2点。

第7類:三戸式土器(第27図87)破片総数1点。

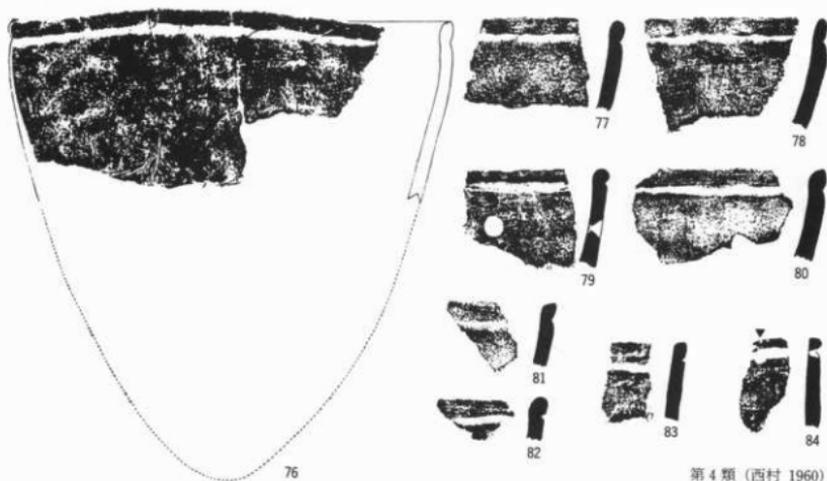
第8類:田戸下層式(第27図88~93)破片総数15点。

第9類:植房式に該当するもの(第27図94)破片総数1点。

なお、後年『利根川下流域』報告では、第1~6類を第一群土器(燃糸文系の土器)として6類型に、第7・8類を第二群土器(沈線文系の土器)として2類型に、第9類を第三群土器(縄文前期前半期の土器)に分類しているが、細別については変更はされていない。土器の層位的出土状況は、第7~9類は黒

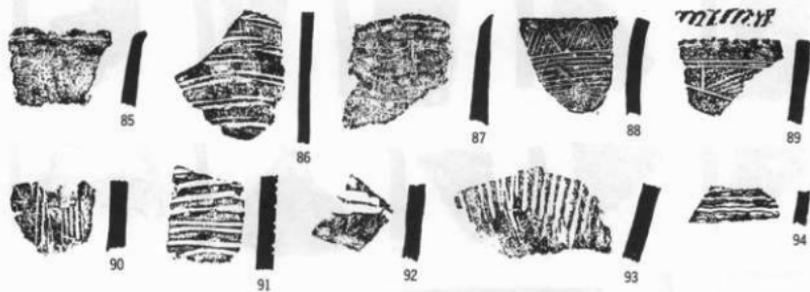


第3類c種 (西村 1960)

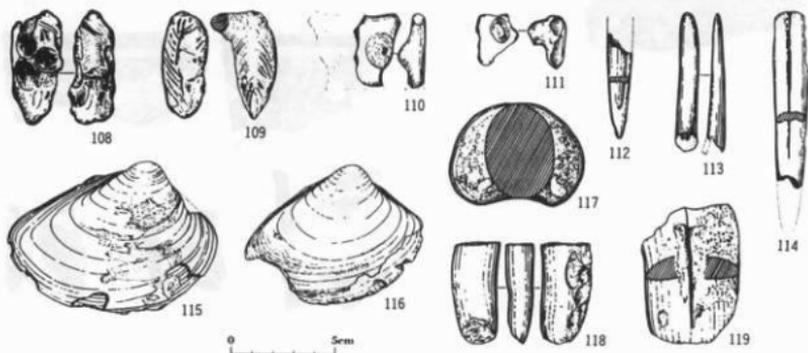
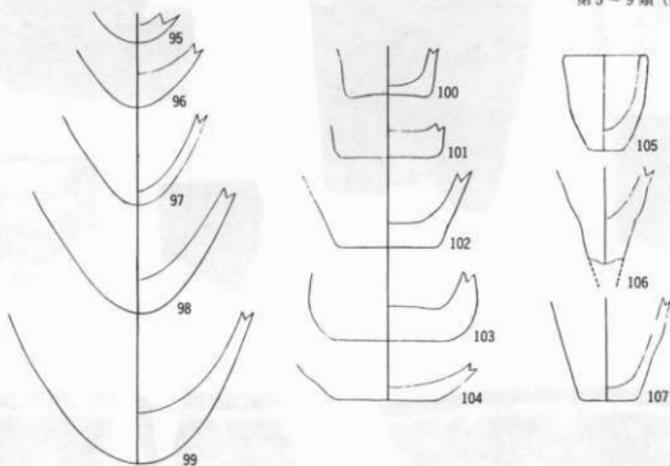


第4類 (西村 1960)

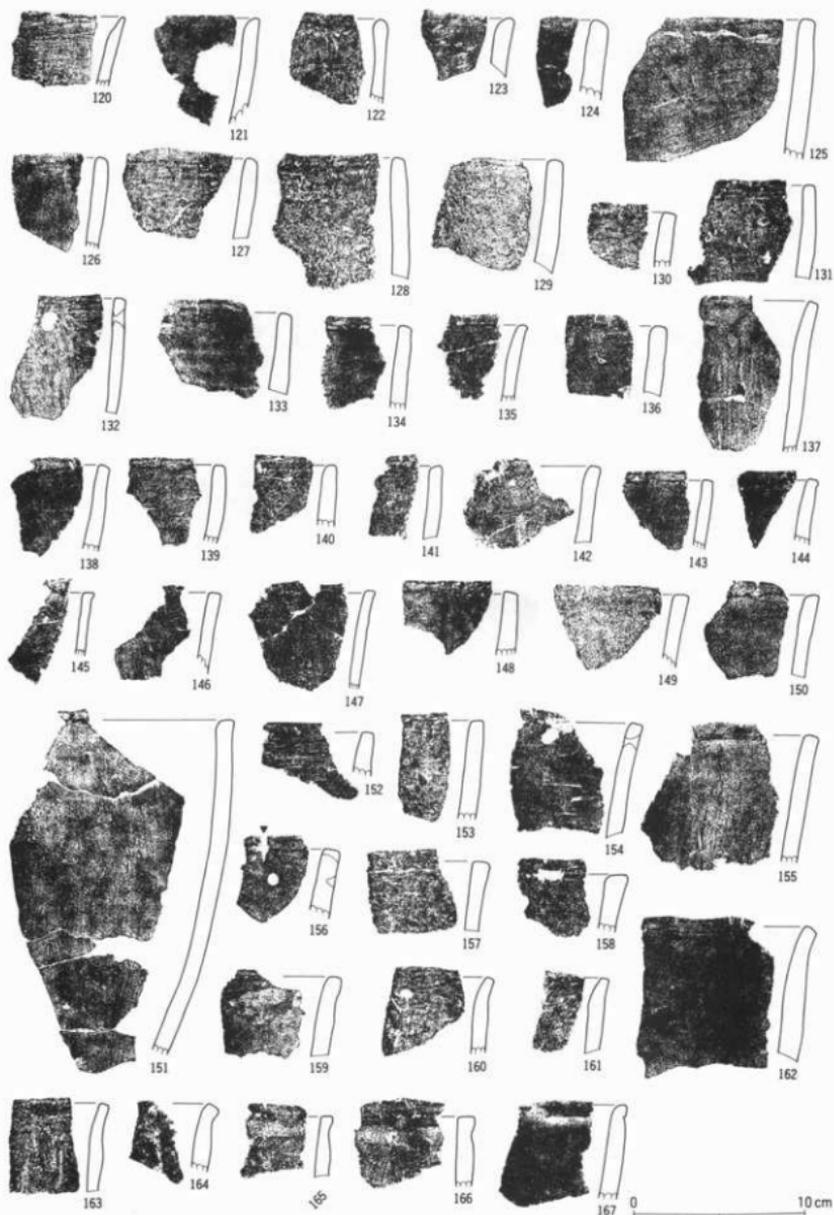
第26圖 昭和33年早稲田大学調査資料 (3) 縮尺: 1/3



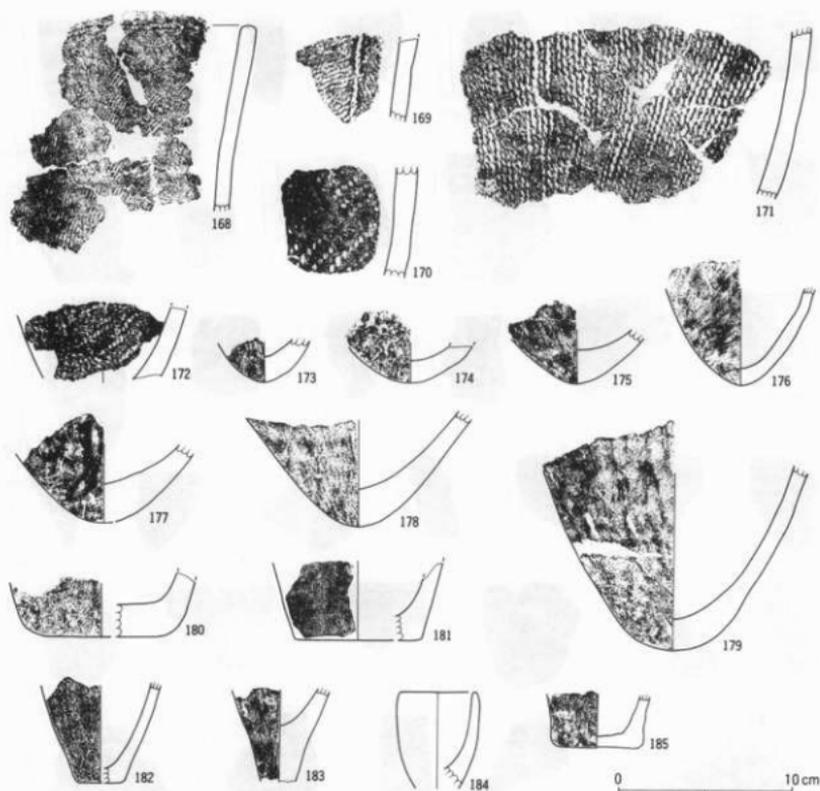
第5～9類 (西村 1960)



第27図 昭和33年早稲田大学調査資料(4) 縮尺: 1/3



第28図 昭和33年早稲田大学調査資料（5）（未収録資料）



第29図 昭和33年早稲田大学調査資料(6)(未収録資料)

色土層の出土で、撚糸文系の土器とは明確に区分されるのに対し、第1～6類の多くが貝層からの出土しており、層位的差異は確認されていない。しかし、最下層の混貝褐色土層は、貝層とは明確に区分されており、土器の内容差には注意する必要がある。以下最下層出土の土器を列記すると、1・6・17・22・26・27・36・37・42・43・45・47・48・81・85と、未収録資料では124・125・172・175・177が加わる。第3類a種としたものの多くが、この層に含まれ、また花輪台I式に類する1、第5類の85が同一層で出土していることは重要である。西村氏は鶴崎貝塚出土の土器について、花輪台I式にある特殊な羽状縄文が付されたものが見当たらないこと、また無文土器は平板式に比べ厚な作りを示し、一体に緻密で重量感があり、擦痕が顕著ではないことを挙げ、前者については花輪台I式、後者については同II式との関連を指摘することとなり、編年上の具体的な位置には慎重な姿勢をとっている。

今回鶴崎貝塚を再調査したのを機に、早稲田大学考古学研究室から昭和33年調査時の未収録資料の公表についての許可をいただいた。無文土器にかなりのバラエティーが認められたため、西村分類を踏襲した上で、報告者の分類に則して紹介したい(第28・29図)。

## 第1群土器：撚糸施文の土器

1類：縄文施文土器（西村分類第1類，168・169・170・172）

2類：撚糸施文の土器（同第2類，52）

3類：口縁直下に撚糸の側面圧痕を有する土器（同第5類）

## 第2群土器：早期初頭の無文土器

1類：口唇が丸棒状をなすか、弱く面取りされるもの

a種：口唇が丸棒状をなす（同第3類a種，1～5）

b種：口唇が弱く面取りされ、平坦でないもの（同第3類b種，125～130）

c種：口唇が弱く面取りされ、やや平坦なもの（同第3類b種，131～142）

2類：口縁が平坦に強く面取りされているもの（同第3類c種）

a種：口唇が薄手のもの（143～147）

b種：口唇がやや厚手のもの（148～155）

c種：口唇が厚手のもの（156～158）

3類：口縁が弱く外反するもの

a種：口唇が平坦なもの（同第3類c種の一部，159・162）

b種：口唇がやや平坦なもの（同第3類b種の一部，160・161・163）

4類：口縁直下が外反し、浅い幅広の溝状をなすもの

a種：口縁が平坦なもの（同第3類c種の一部，164～166）

b種：口縁がやや平坦なもの（同第3類b種の一部）

5類：口縁直下に沈線や凹線を巡らし、口縁を区画するもの

a種：口縁を削り出し、段を有するもの

b種：口縁直下に凹線を有するもの

c種：口縁直下に沈線を有するもの（同第4類，167）

これらの分類には、判断に迷うものも認められる。特に第2群1類の土器に顕著で、b種とc種の区分が曖昧なものが存在する。また、2類としたものと、3類としたものの差異が微妙なものもあり、この分類が果たして妥当であるかは問題を残しているものの、次型式との関連を考慮して、外反を新しい様相と捉え、敢えて分離を試みた次第である。

上記の分類基準を、今回の調査資料に適用させたのが、第30・31図である。鶴崎貝塚出土の第2群とした無文土器は、胎土・調整・色調の点で、極めて斉一性の高い内容となっている。胎土は緻密で、堅固で重量感があり、微砂粒ないし細砂粒を多く含み、白色粒子が顕著である。調整は口縁に沿って横位、体部には縦位の削り痕を有し、丁寧なナデないしミガキ調整が加えられ、擦痕はそれほど顕著ではなく、光沢を有するものもある。口端は面取りされるものが多く、色調は黒色～暗褐色をなすものがほとんどである。

今回の調査では、第1群とした撚糸施文の土器が極めて少なかった。貝層の調査が南端に限られたことによるものか、時期的差異を意味するかは定かではないが、口縁部資料はわずかに1点しか得られていない。

9トレンチでは1mの貝層を掘り下げたが、前回の調査同様層位的に明瞭な差異を抽出することはできなかった。斜面貝層のため、第12図60のように上・下層での接合も看取された。敢えて層位状況から時間的差の指摘を試みるとすれば、5類c種とした同図27・28が上層から出土したのに対し、同b種とした同

No.	古代No.	判別No.	トワノ名	層位	日付	備考
1	5-1	3-1	B I	瀬貝層土	5/4	側面庄痕の痕跡?
2	5-2		B III	瀬貝灰層	5/4	
3	5-3	3-2	B II	貝層	5/3	Lの側面庄痕
4	5-6		B II	瀬貝灰層	5/4	口唇に縁を持つ
5	5-7		C		5/3	趾線位回転
6	5-4		B III	瀬貝層土		趾線位回転
7	5-5					遺物不明
8	5-8		A III	貝層		
9	5-9					遺物不明
10		3-4	A III	貝層		
11		3-5	A II	貝層		
12		3-6	A III	貝層		
13		3-7				注記ナシ
14	6-1	3-8	B III	瀬貝	5/3	Rの側面庄痕
15	6-2	3-9	B III	瀬貝	5/4	Rの側面庄痕
16	6-3	3-10	B III	瀬貝灰層	5/4	L7とRの側面庄痕
17	6-4	3-11	B II	瀬貝層土	5/4	口唇平直
18	6-5	3-24	A III	貝層		19・21と同一層体
19	6-6	3-22	A II	貝層		18・21と同一層体
20	6-7		A II	貝層		
21	6-8	3-23	A II	貝層		18・19と同一層体
22	6-9	3-27	B III	瀬貝層土		R位位回転
23	6-10					注記ナシ
24	6-11	3-25	B III	瀬貝灰層		25と同一層体
25	6-12	3-26	A II	貝層		24と同一層体
26	6-13		B III	瀬貝層土	5/4	
27	6-14	3-15	B III	瀬貝層土		
28	6-15					遺物不明
29	6-19	3-12	A III	貝層	5/4	
30	6-16	3-19	B I	瀬貝		
31	6-21		A III	貝層		
32	6-20		B III	瀬貝上部	5/5	趾線位回転?
33	6-17					遺物不明
34	6-18					遺物不明
35		3-20	B I	瀬貝灰層		
36		3-21	B II	瀬貝層土	5/4	
37		3-13	B II	瀬貝層土	5/4	
38		3-14	A II	貝層	5/3	39と接合
39		3-18	A II	貝層	5/3	38と接合
40		3-16	A II	貝層		
41		3-17	B III	灰貝土層		
42	7-1	4-4	B II	瀬貝層土	5/4	1瀬a種
43	7-2	4-5	B II	瀬貝層土	5/4	1瀬a種
44	7-3		B II	貝層	5/5	1瀬a種
45	7-4	4-3	B III	瀬貝層土	5/4	1瀬a種
46	7-5	4-1	B II	灰貝土層	5/5	1瀬a種
47		4-2	B I	瀬貝層土	5/3	1瀬a種
48		4-6	B III	瀬貝層土	5/4	1瀬a種
49	7-7		B II	瀬貝灰層		1瀬a種
50	7-21		B I	貝層	5/5	4瀬b種
51	7-22					注記ナシ、4瀬b種
52	7-6		A II	貝層	5/3	1瀬b種
53	7-8	4-11	B III	貝層	5/3	切込有、1瀬b-c種
54	7-9	4-12				遺物不明、3瀬b種
55	7-10	4-15	B III	灰貝土層	5/5	1瀬b-c種
56	7-11					遺物不明
57	7-12					注記ナシ、1瀬b-c種
58		4-7	B III	瀬貝灰層	5/4	1瀬b-c種
59	7-23		B II	貝層	5/5	3瀬b種?
60	7-13		B II	瀬貝灰層		2瀬b-c種
61	7-14		B III	瀬貝灰層	5/4	切込有、2瀬b-c種
62	7-15		B III	瀬貝上部	5/5	2瀬b-c種
63	7-16		A III	貝層		2瀬b-c種
64	7-18	4-19	A III	貝層		2瀬b-c種
65	7-17	4-20	B III	瀬貝灰層	5/4	3瀬a-b種
66	7-19	4-17	B III	瀬貝灰層	5/4	2瀬b-c種
67	7-20		B III	瀬貝灰層		2瀬b-c種
68	7-24					遺物不明、4瀬a種
69	7-25		A II	貝層	5/3	4瀬a種
70	7-27		B III	瀬貝上部	5/5	4瀬a種
71		5-2	B II	瀬貝灰層		2瀬a種?
72		5-1	B I	瀬貝	5/3	3瀬a-b種
73		4-14	A II	貝層	5/3	2瀬b-c種
74		4-18	B II	瀬貝	5/3	2瀬b-c種
75	7-28		B III	灰貝土層	5/5	4瀬a種

No.	古代No.	判別No.	トワノ名	層位	日付	備考
76		5-3	A II	貝層	5/3	77・78と接合
77	7-29		A II	貝層	5/3	76・78と接合
78	7-30		B III	瀬貝灰層	5/4	76・77と接合
79	7-31	5-5	B I	貝層	5/4	
80	7-32	5-4	B III	瀬貝灰層	5/4	
81	7-33		B III	瀬貝層土	5/4	
82	7-34					注記ナシ
83	7-35	5-7	B III	瀬貝灰層		側面庄痕の痕跡?
84	7-36	5-6	B II	貝層		鋭い切込有
85	7-26	5-8	B III	瀬貝層土	5/4	Rの側面庄痕
86	7-37	5-9	B II	貝層	5/3	半横竹管状工具
87	8-1	6-1	B	厚土層		3層式
88	8-2	6-2	B	厚土層		田戸下層式
89	8-3	6-3	B	厚土層		田戸下層式
90	8-4	6-4	B	厚土層		田戸下層式
91	8-5	6-5	B	厚土層		田戸下層式
92	8-6		B	厚土層		田戸下層式
93	8-7	6-6	B	厚土層		田戸下層式
94	8-8	6-7	B	厚土層		田戸下層式
95	9-H		A II			173
96	9-I		B III	瀬貝層土		175
97	9-J		C			176
98	9-K		B III	灰貝土層	5/5	178
99	9-L					注記ナシ、179
100	9-B		B II	灰貝土層		185
101	9-E					遺物不明
102	9-C					181
103	9-D		B III	瀬貝灰層		180
104						遺物不明
105	9-G		B II	瀬貝灰層		184
106	9-F		B II	貝層	5/3	183
107			B II	貝層	5/3	182
108	4-4	7-4	A III	瀬土貝層		土製品
109	4-5	7-5	A II	貝層		土製品
110	4-6	7-6	B III	瀬貝灰層		土製品
111	4-7	7-7	B III	瀬貝層土		土製品、注記ナシ
112	4-10	7-10	B III	瀬貝灰層		新発見
113	4-9	7-9	A III	瀬土貝層		新発見
114	4-8	7-8	B III	瀬貝灰層		新発見・鹿
115	4-11	7-11	B	瀬貝灰層		
116	4-12	7-12	B	瀬貝灰層		
117	4-1	7-1	C	瀬土貝層		石器
118	4-3	7-3	A II	貝層		石器
119	4-2	7-2	A II	貝層		石器
120			A II	貝層	5/3	1瀬a種
121			B II	瀬貝灰層	5/4	1瀬a種
122			C			1瀬a種
123			B II	瀬貝灰層		1瀬a種
124			B I	瀬貝層土	5/4	1瀬a種
125			B III	瀬貝層土	5/4	1瀬b種
126			B II	瀬貝灰層	5/4	1瀬b種
127			C	貝層	5/3	1瀬b種
128			B III	貝層	5/3	1瀬b種
129			A III	貝層	5/4	1瀬b種
130			B I	瀬貝		1瀬b種
131			B III	瀬貝灰層	5/4	1瀬c種
132			B I	貝層	5/5	1瀬c種
133			B III	瀬貝灰層	5/4	1瀬c種
134			B II	貝層	5/3	1瀬c種
135						注記ナシ
136			A I	瀬貝		古代写真図版2-19
137			A III	貝層	5/3	1瀬c種
138			B III	貝層		1瀬c種
139			A III	貝層	5/3	1瀬c種
140			A III	貝層	5/4	1瀬c種
141			B III	貝層	5/3	1瀬c種
142			B I	瀬貝	5/3	1瀬c種
143			B I	貝層	5/5	2瀬a種
144			B II	瀬貝灰層		2瀬a種
145						注記ナシ、2瀬a種
146			B III	瀬貝灰層		2瀬a種
147						注記ナシ、2瀬a種
148			B II	瀬貝灰層		2瀬b種
149			B II	貝層		2瀬b種
150			B II	貝層	5/3	2瀬b種

表7 早稲田大学調査資料出土位置一覧(1)

No.	古代No.	利根No.	トノメ名	層位	日付	備考
151			B I	混貝灰層	5/4	2類b種
152			A II	貝層		2類b種
153			A II	貝層		2類b種
154			B I	貝層	5/5	2類b種
155			A II	貝層	5/2	2類b種
156			B II	混貝灰層	5/4	切込み、2類c種
157			B I	貝層	5/4	2類c種
158			B I	混貝灰層		2類c種
159			B III	混貝灰層	5/4	3類a種
160			B III	灰貝土層	5/5	3類b種
161			B II	貝層		3類b種
162						注記ナシ、3類a種
163			A II	貝層	5/3	3類b種
164			B II	混貝灰層		4類a種
165			B	黒土層		4類a種
166			B III	灰貝土層	5/5	4類a種
167			C		5/3	
168			B III	混貝土層	5/5	32、33、混位回転?

No.	古代No.	利根No.	トノメ名	層位	日付	備考
169			B III	混貝灰層		3と同一個体
170			B II	貝層		混位回転
171			A II	貝層	5/3	38・39
172			B III	混貝土層		混位回転
173	9-B		A II	貝層		95
174			B I	貝層	5/5	
175	9-I		B III	混貝土層		96
176	9-J		C	貝層		97
177			B III	混貝土層		
178	9-K		B III	灰貝土層	5/5	98
179	9-L					注記ナシ、99
180	9-D		B III	混貝灰層		103
181	9-C					102
182			B II	貝層	5/3	107
183	9-F		B II	貝層	5/3	106
184	9-G		B II	混貝灰層		105
185	9-B		B II	灰貝土層		100

表8 早稲田大学調査資料出土位置一覧(2)

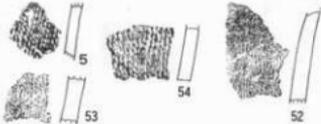
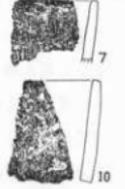
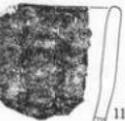
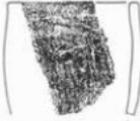
図29が下層から出土した点があげられる。当該期研究を瞥見すると、沈線を有するものを古く、口縁平坦の無文を新しく位置付ける傾向がある。しかし、鶴崎貝塚の出土状況は、既存の見解を支持するには至っておらず、伴出又は前者が上層という状況を示している。

層位的状況として注目しなければならないのは、西村氏の調査時における最下層の混貝褐色土層出土の土器である。この層からは口唇が円棒状をなす無文土器と花輪台I式相当の土器、口縁直下に側面疚痕を有する無文土器、沈線を有する土器が出土している。貝層直下という明瞭な区分のもとに検出された土器群であり、貝塚の主体となる2類・3類(西村分類の第3類b・c種)が出土していないことは重要であろう。主体的な土器群より古い一群として捉えることが可能であり、これらが花輪台I式期の型式組成を示しているものと理解したい。この中には第24図17のように口唇を平坦にした燃糸施文や、第26図81のように内削ぎ状の口縁を有する沈線を巡らす土器が含まれている。この層位的事例に立脚するならば、口唇が平坦な無文土器が、報告者が1類a種とした丸棒状をなすものよりも新しい様相であることが指摘できる。口唇が平端な土器は、既に夏島式に存在しており、以降その割合を増してくるようであり、第24図17のように最下層からも同様の燃糸施文の土器が出土している。こういった技術的系統の下に、鶴崎貝塚の主体的土器群である口唇平坦の無文土器が形成されてきたのであろう。第24図3は羽状縄文が施文されるが、口唇の形状は主体的土器群に共通する。口縁の無文部は8mmと狭小であり、最下層出土の同図1よりは新しい位置付けが可能なるように思われる。もし主体的土器群に併行するのであれば、縄文ないし燃糸施文の土器は、一部花輪台II式に併行する段階まで残存する可能性があるように思われる。また、鶴崎貝塚無文土器の特徴として、口端の切込みが挙げられる。今回の調査では2点しか出土していないが、早稲田大学資料では4点出土しており、希有な要素でないことがうかがえる。焼成前に切り込まれており、これが後続型式の口端の刻みと関連を有していくのかどうか、今後の検討を要する問題である。

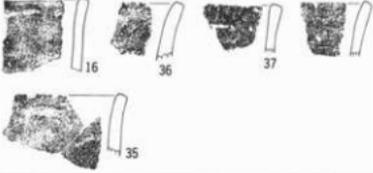
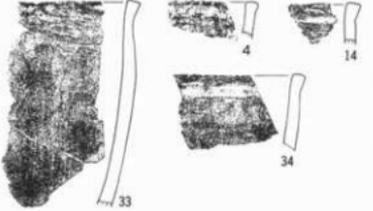
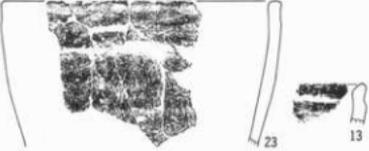
なお、前回の調査では放射性炭素の年代測定が実施されており、ヤマトシジミでは9,450±210B.P.、ハマグリでは9,000±200B.P.の年代が得られている。

注

- 1) 西村正衛・金子浩昌 1960 「千葉県香取郡鶴崎貝塚」『古代』第35号 早稲田大学考古学会
- 2) 西村正衛 1984 「千葉県香取郡佐原市鶴崎貝塚—縄文早期文化の研究」『石器時代における利根川下流域の研究』早稲田大学出版部

		9 トレンチ	10 トレンチ	11 トレンチ
第1群土器	1類			
	2類			
	3類			
第2群土器	1類a種			
	1類b・c種			
				
				
	2類a種			
2類b・c種				

第30図 鶴崎貝塚平成7年出土土器分類図(1)

		9 トレンチ	10 トレンチ	11 トレンチ
第 2 群 土 器	3 類 a ・ b 種		 Φ	
	4 類 a 種			
	4 類 b 種			
	5 類 a 種			
	5 類 b 種			
	5 類 c 種			

第31図 鶴崎貝塚平成7年出土土器分類図(2)

## IV まとめ

鶴崎貝塚は縄文時代草創期終末～早期初頭に形成された国内でも有数の古さを誇る貝塚である。その規模は南北11m、東西13mと小さいものであるが、貝層は谷状の地形に形成されており、良好な遺存状況が確認された。貝層は1m内外の厚さで、20度～30度の傾斜をもって堆積しており、下端は地表下2mの深さに達していた。同様の深い堆積は小見川町の城ノ台南貝塚でも認められており、当地域の早期貝塚の特徴と見ることが可能であろう。貝類はヤマトシジミを主体とし、これにハマグリ・マガキ・アカニシの鹹水産が加わる。西之城貝塚の調査において、井草-夏島期の海進の汀線が佐原市辺に求められていたが、鶴崎貝塚により、早期初頭の大須賀川下流部は淡水の影響を強く受けていたもの、利根川本流付近では海水の影響が現れていたことが推測される。また、貝層中からはシカとイノシシの骨が多量に出土し、他の動物遺体の内容と合わせ、貝層が中期の出土様相を呈していたとする西村氏の指摘が再確認された。

今回の調査では、昭和33年に調査された早稲田大学調査区的位置を明確にすることができた。11トレンチの貝層断面図は、BトレンチII区にほぼ相当するものと推察される。早稲田大学調査区は貝塚のほぼ中心に開設されたが、今回の調査では貝塚南端の9トレンチの貝層を掘下げた。早稲田大学調査区に比べ燃糸施文の土器が極めて少なく、貝塚内で遺物の出土傾向に差異を示す結果となった。

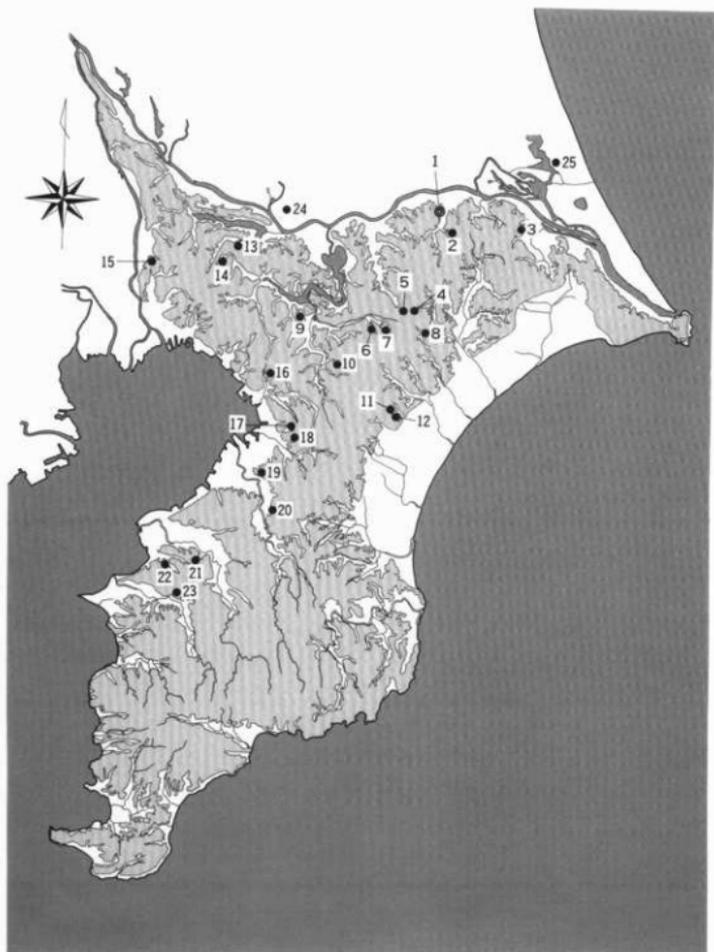
鶴崎貝塚は早期初頭の無文土器を主体とする遺跡として、当該期編年研究が進行しつつあった初期の段階に報告された。しかし、周辺に類似遺跡の報告がなく、孤高の遺跡として評価され、花輪台I・II式分離否定論と相まって、積極的に論じられることが少なかった。西村氏は花輪台貝塚との対比の中で土器を論じ、無文土器を花輪台II式との関連で考えた。宮崎朝雄氏は花輪台II式としての無文土器群の存在を否定し、有文土器との組成の中で鶴崎例を考えている。一方、戸田哲也氏は鶴崎例に対し、花輪台II式併行と平板式併行の2区分案を提示している。原田昌幸氏は広義の平板式の範疇の中で捉え、鶴崎例を古・中段階に位置付けている。今回早稲田大学調査資料の層位的検討を踏まえ、主体的土器群より古い段階の土器群を抽出することができた。筆者は花輪台I式期の型式組成の内容を示していると理解している。主体的土器群に顕著な口唇の削平は、先行する有文土器に認められており、その系統的關係が想定されるように思われる。

なお、今回貝塚形成に伴う生活域が想定される丘陵頂部の確認調査も実施した。しかし、奈良・平安時代の堅穴住居跡7軒と溝状遺構が検出されたのみで、縄文時代の遺構を検出するには至らなかった。それは後世の削平の影響が丘陵頂部の広範囲に及んでいたためで、縄文時代の遺構は貝塚に限定されることが明確となった。

限られた期間の調査ではあったが、今回鶴崎貝塚を把握するための基礎的な資料は十分得ることができたと思われる。ただ動物遺存体の分析は、その量が膨大であったため、詳細は今後の検討に委ねることになるが、最古期の貝塚である西之城・夏島・花輪台・平板の各貝塚の再調査が望めない現状では、今回の鶴崎貝塚の成果が、当該期貝塚研究の貴重なデータとなるものと期待される。

今回の調査は、貝塚の範囲及び内容を一層明らかにするとともに、本貝塚の学術的重要性を再認識させることとなった。

# 写 真 图 版



1：物崎遺跡、2：中塚遺跡、3：城ノ台南貝塚、4：木の根遺跡、5：浅間台遺跡、6：墨新山遺跡、7：金堀遺跡、8：宝永作遺跡、9：生谷埴塚遺跡、10：瀬田原遺跡、11：南外輪戸遺跡、12：久我台遺跡、13：寺向遺跡、14：復山谷遺跡、15：二ツ木向台遺跡、16：東寺山石神遺跡、17：池田古墳群、18：南二重塚遺跡、19：西広貝塚、20：土字遺跡群No.100地点、21：磯ノ口向台遺跡、22：上馬船遺跡、23：苗見作遺跡、24：花輪台貝塚、25：伏見遺跡

第32図 千葉県内草創期終末～早期初頭主要遺跡



鶴崎貝塚周辺の航空写真



遺跡遠景



遺跡遠望



遺跡近景



1トレンチ



2トレンチ



3トレンチ



4トレンチ



5トレンチ



6トレンチ



7トレンチ



8トレンチ



貝塚調査前状況（丘陵北から）



貝塚調査前状況（丘陵南から）



貝塚調査前状況（斜面南から）



貝塚調査風景



貝塚標識



9トレンチ貝層 (北東から)



9トレンチ貝層 (南から)



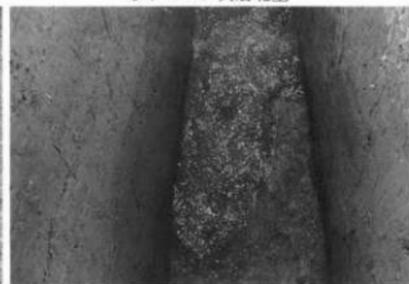
9トレンチ貝層西壁



9トレンチ貝層北壁



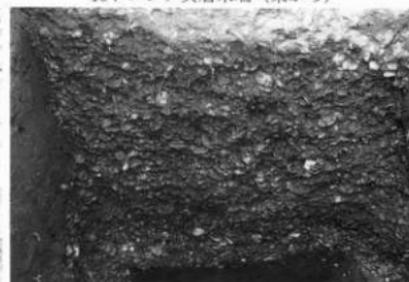
10トレンチ (西から)



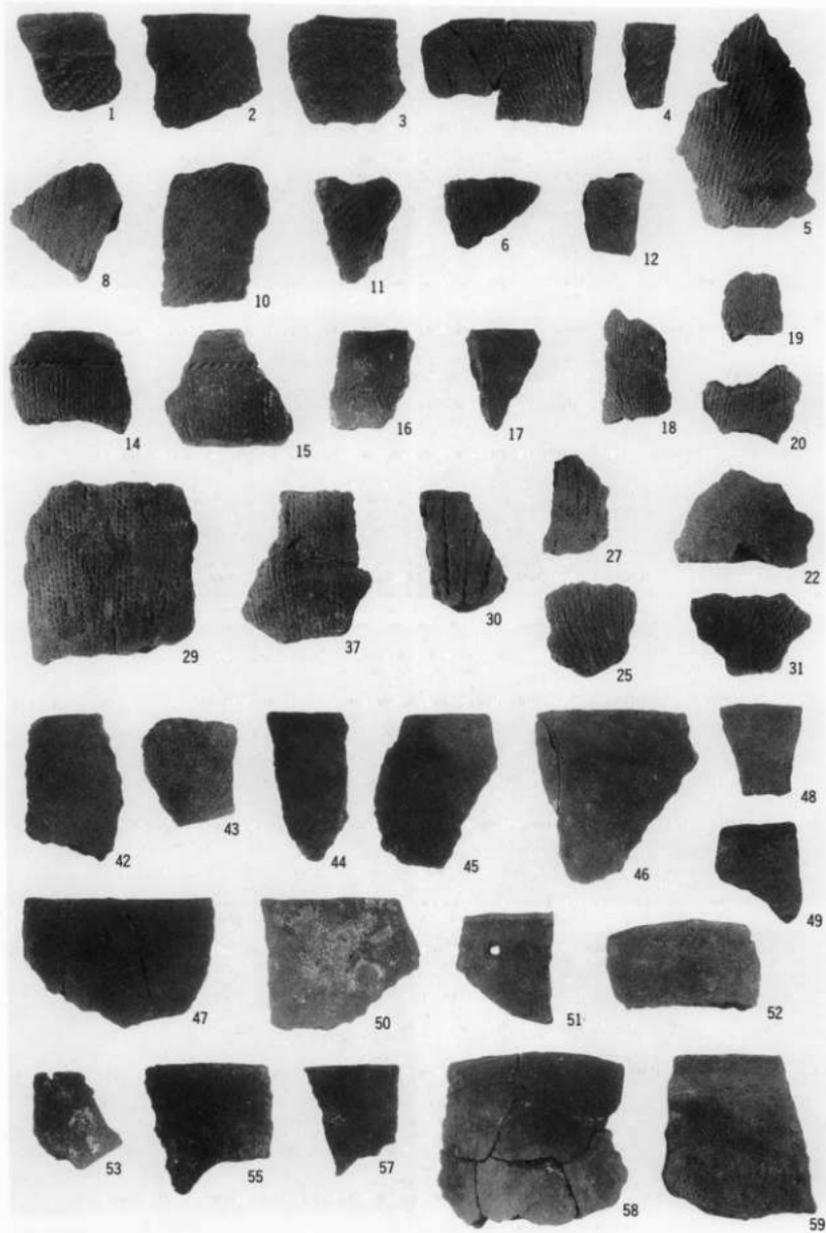
10トレンチ貝層末端 (東から)

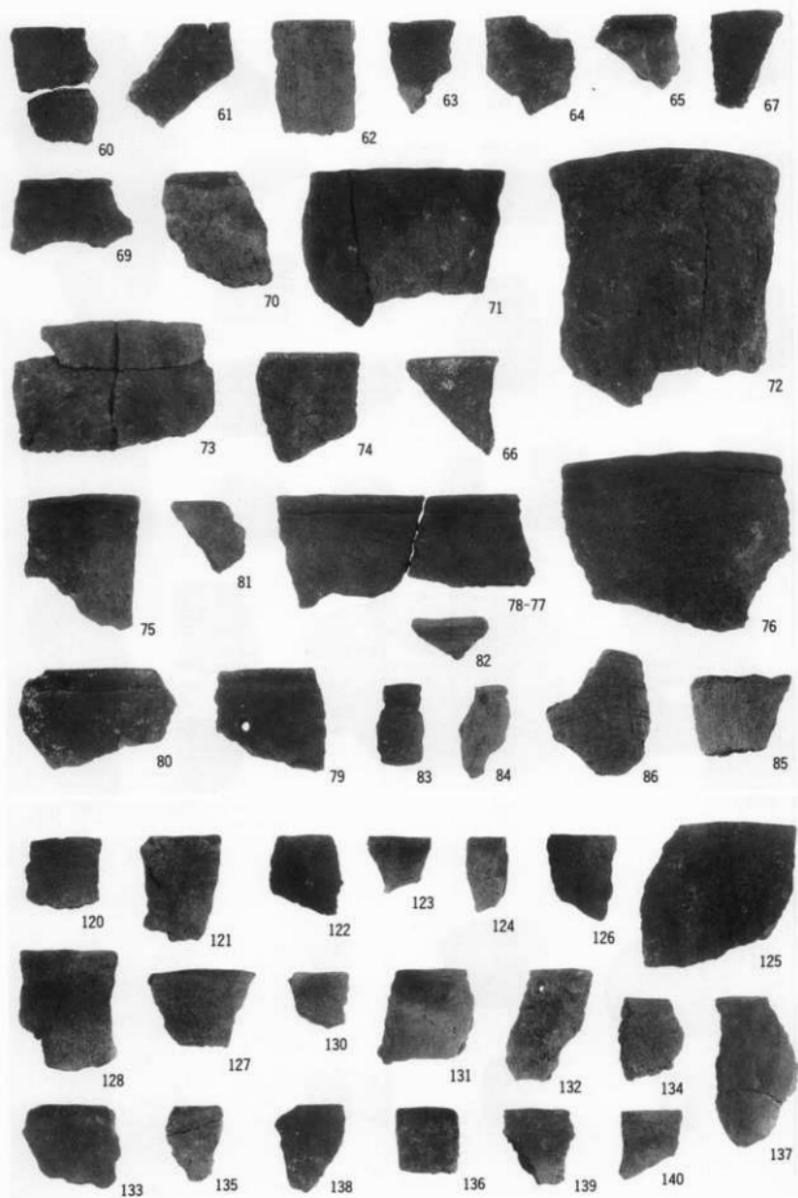


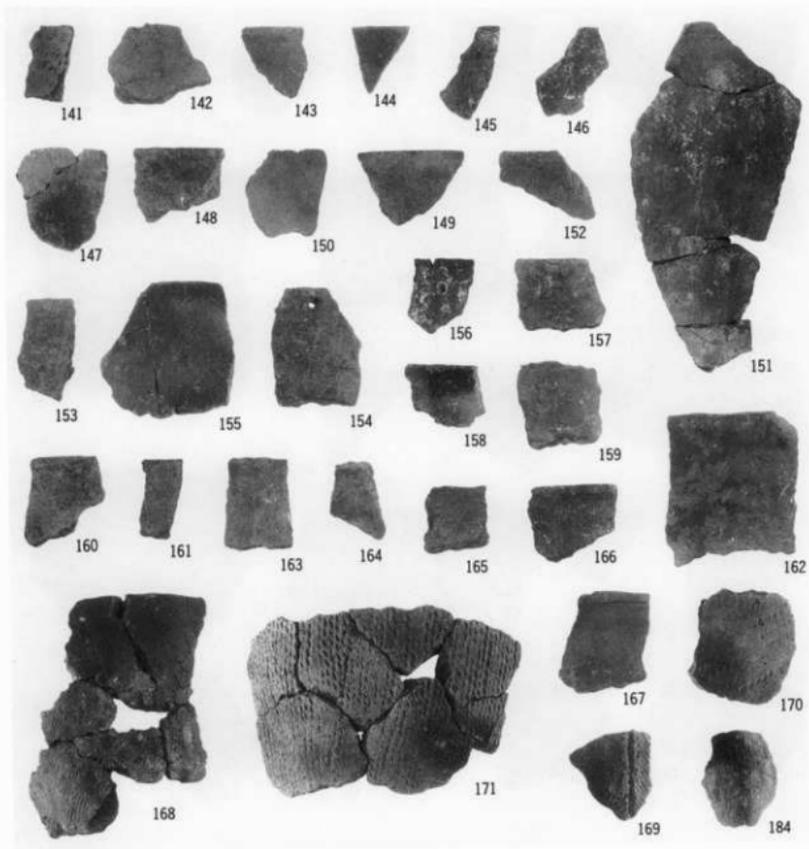
11トレンチ (北東から)



11トレンチ貝層断面





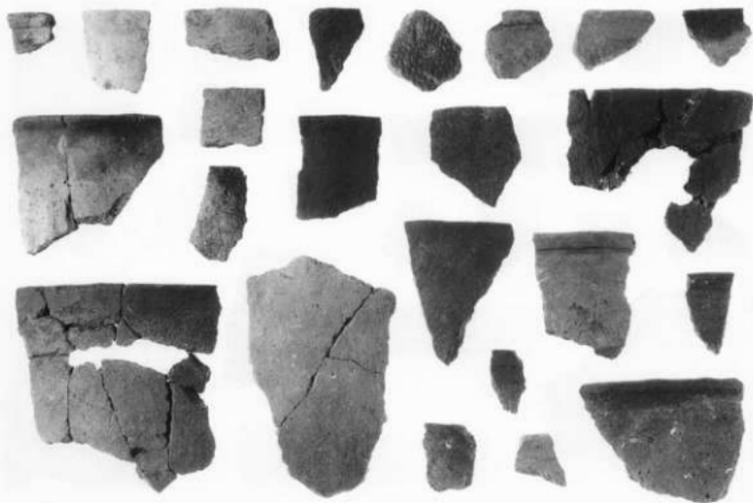


早稲田大学調査資料 (3)

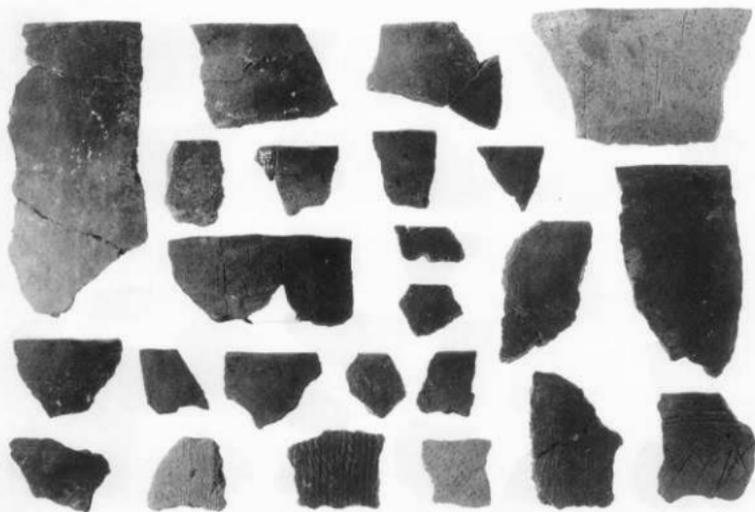


土製品

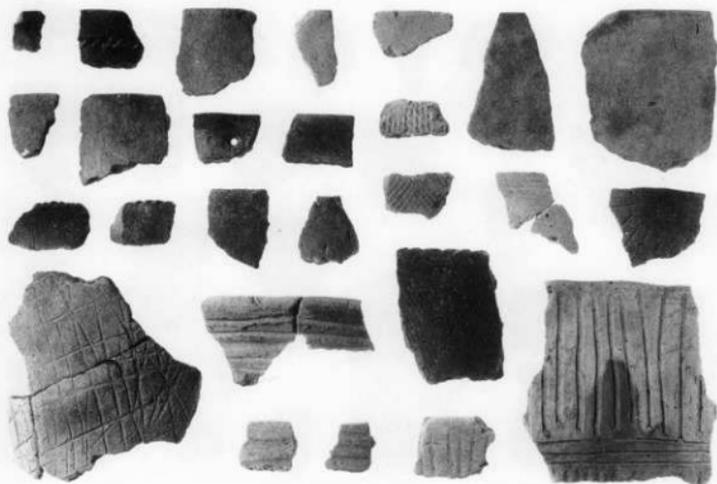
骨角器



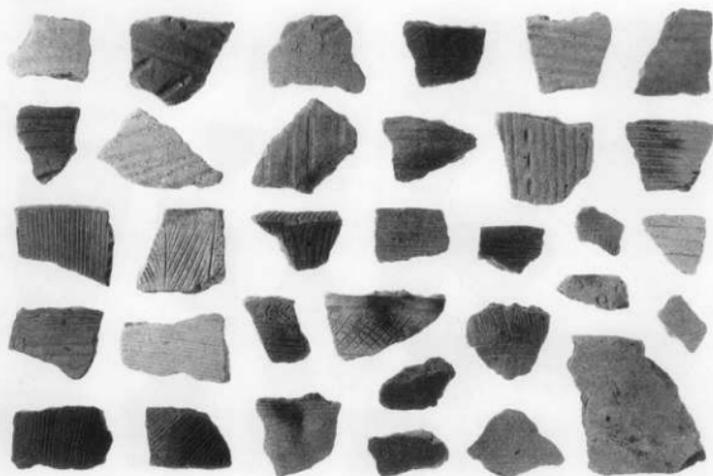
9トレンチ出土土器(1)



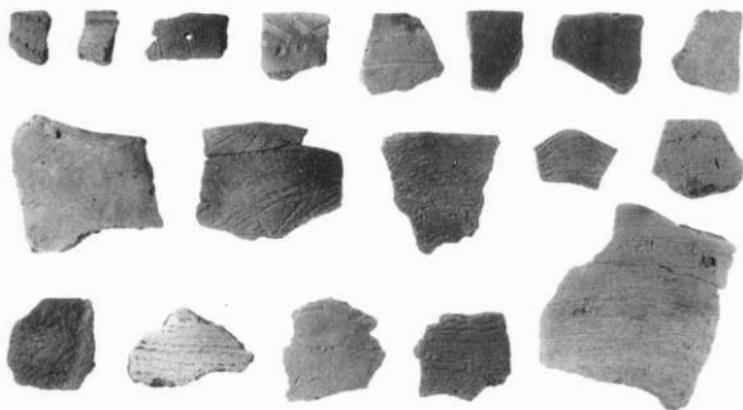
9トレンチ出土土器(2)



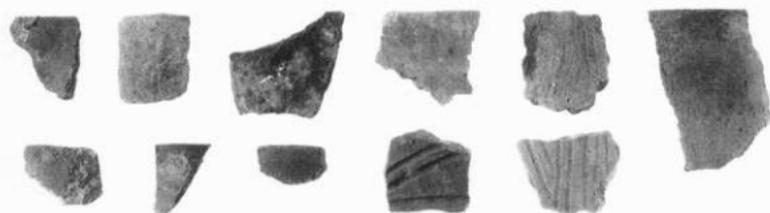
10トレンチ出土土器 (1)



10トレンチ出土土器 (2)



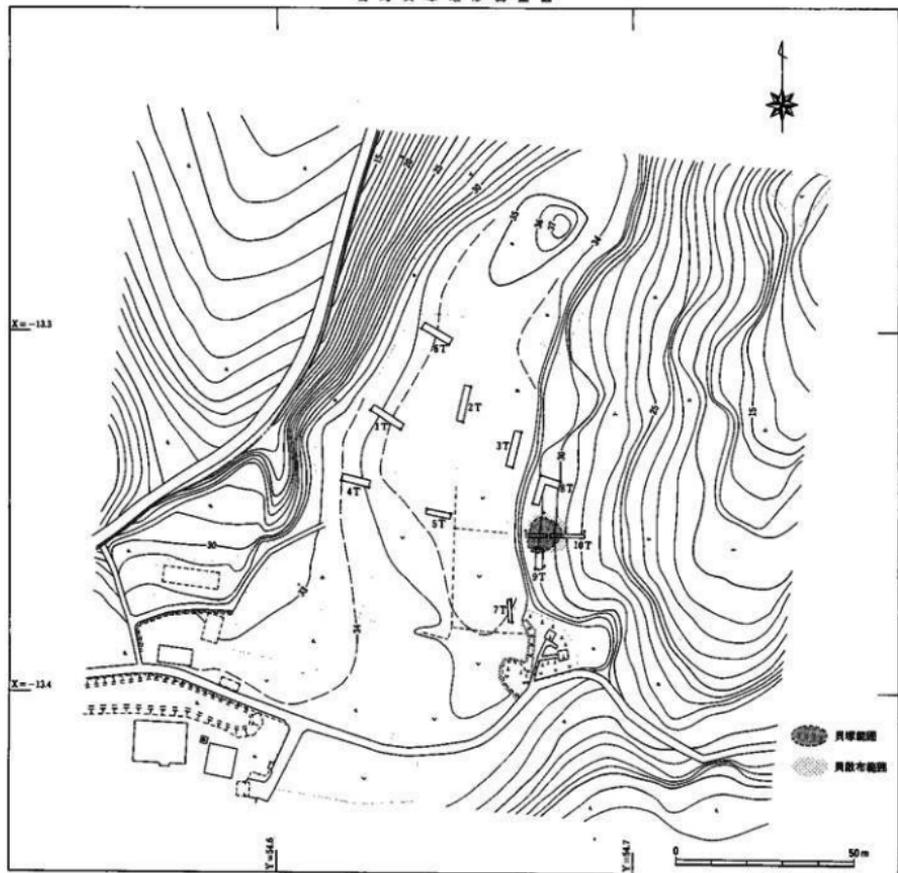
10トレンチ出土土器 (3)



11トレンチ出土土器



貝刃



報告書抄録

ふりがな	さわらしときざきかいづかはつくつちようきほうこくしょ							
書名	佐原市鶴崎貝塚発掘調査報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名	千葉県文化財センター調査報告							
シリーズ番号	第292集							
編著者名	高柳圭一							
編集機関	財団法人 千葉県文化財センター							
所在地	〒284 千葉県四街道市鹿渡809番地の2							
発行年月日	西暦1996年3月29日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号				m <sup>2</sup>	
ときざきかいづか 鶴崎貝塚	さわらしにしざか 佐原市西坂 983他	12209	040	35度 52分 39秒	140度 26分 22秒	19951002 } 19951031	200	国庫補助事業による学術調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
鶴崎貝塚	貝塚	縄文	貝層	縄文土器 (花輪台Ⅰ式～植房式土器) 土製品(土偶など) 石器(石鏃・敲石など) 骨角器(牙斧・垂飾品) 貝製品(貝刃) 獣骨(シカ・イノシシなど)			縄文時代草創期終末～早期初頭の小規模な貝塚で貝層の良好な堆積状況が確認された。	
	集落	古墳～奈良・平安	竪穴住居跡 溝状遺構	7軒 2条	土師器・須恵器・カワラケ			

千葉県文化財センター調査報告第292集

## 佐原市鶉崎貝塚発掘調査報告書

---

平成8年3月29日発行

発 行 財団法人 千葉県文化財センター  
四街道市鹿渡809番地の2

印 刷 株式会社 正文社  
千葉市中央区都町2丁目5番5号

---

本報告書は、千葉県教育委員会の承認を得て  
増刷したものです。